

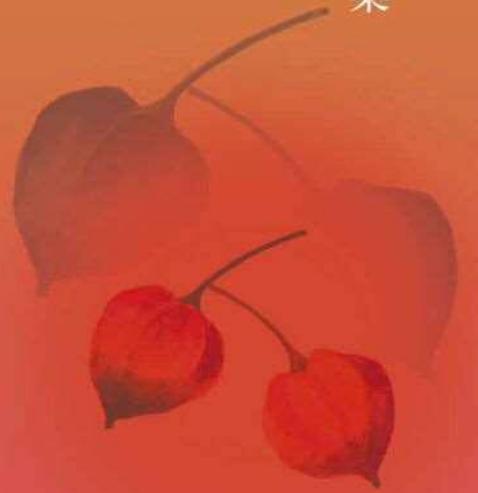
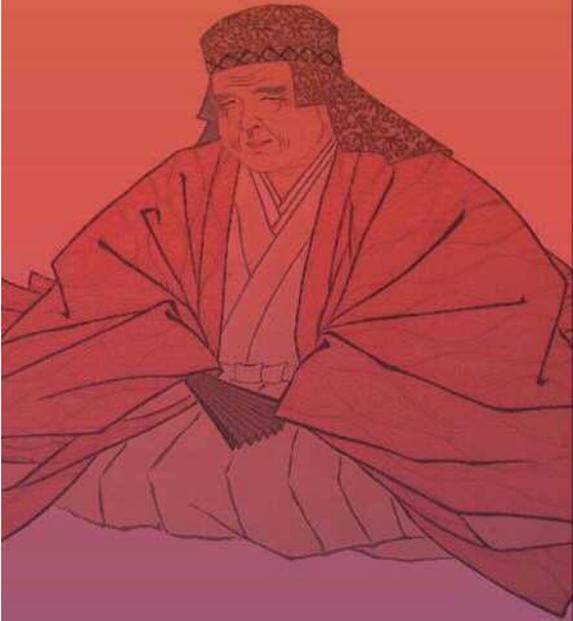
本庄市郷土叢書 第4集

本庄市の人物誌

①

盲目の国学者 塙保己一の生涯

本庄市教育委員会



本庄市郷土叢書 第4集

本庄市の人物誌 ①

盲目の国学者 塙保己一の生涯

本庄市教育委員会



総検校塙保己一正装図（塙保己一記念館所蔵）



国指定史跡 塙保己一旧宅（本庄市児玉町保木野）



塙保己一の墓（本庄市児玉町保木野 塙保己一公園内）

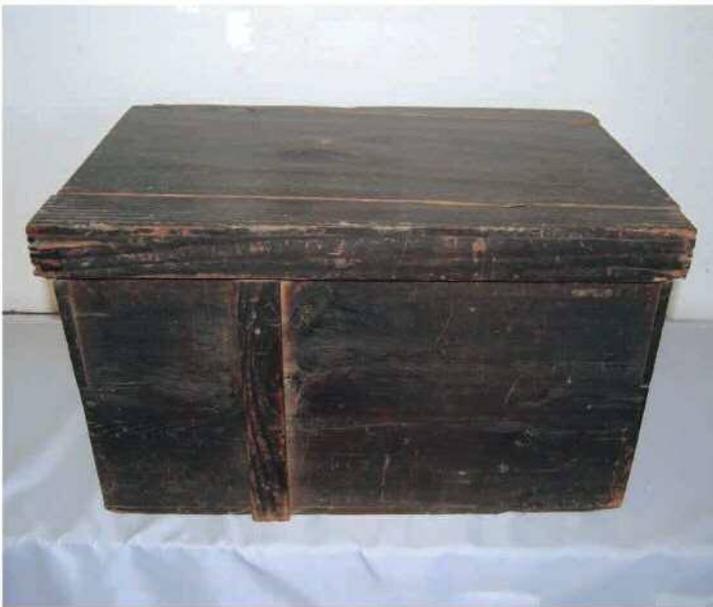


塙保己一記念碑（本庄市児玉町保木野 塙保己一公園内）



県指定文化財 巾着

母手縫いの巾着
(埴保己一記念館所蔵)



県指定文化財 お宝箱

保己一が江戸へ出るときに背負ったと言われる素麺箱
「お宝箱」という名称は林大学頭命名という
(埴保己一記念館所蔵)

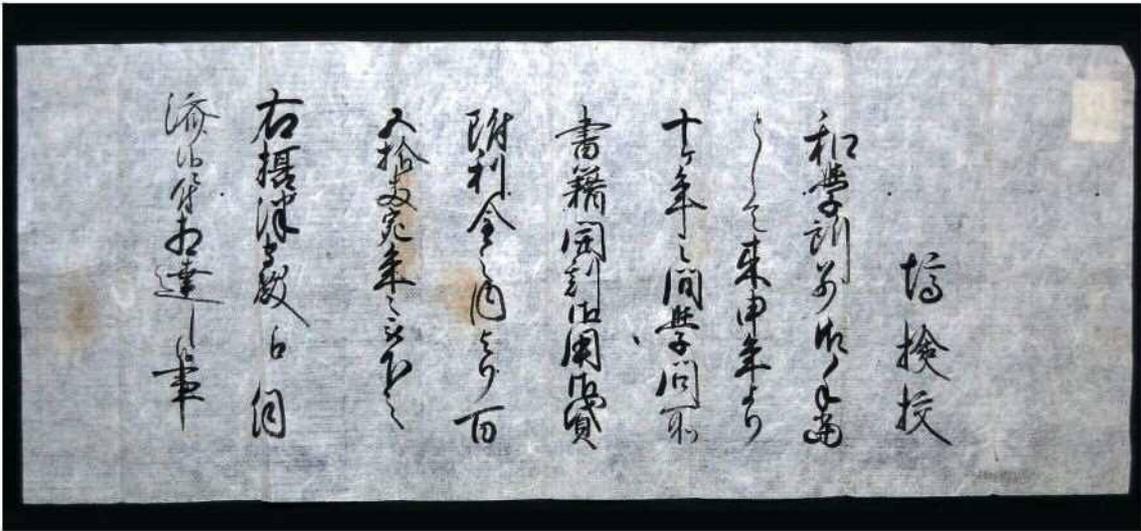


県指定文化財 天満宮軒丸瓦

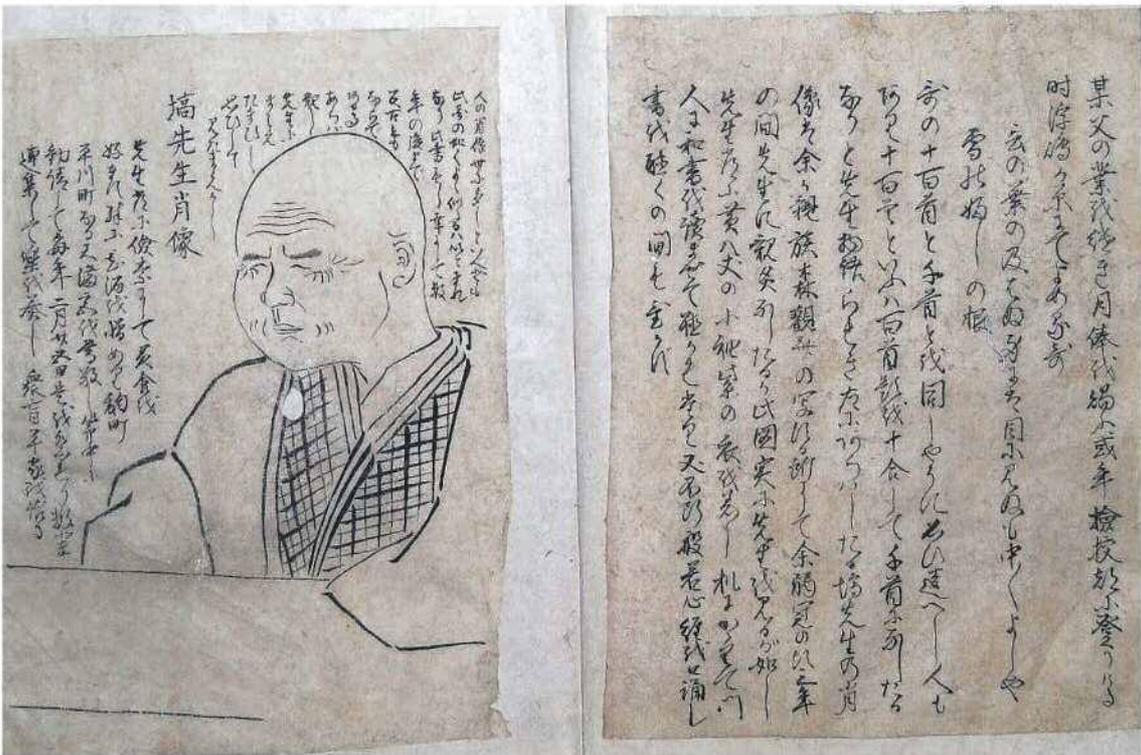
保己一が和学講談所敷地内に勧請した天満宮に架かっていた軒丸瓦
(埴保己一記念館所蔵)



県指定文化財 寛政7年 温故堂塾中法度 (埴保己一記念館所蔵)



県指定文化財 文化8年 幕府申渡 (埴保己一記念館所蔵)



県指定文化財 年不詳 御伝 (埴保己一記念館所蔵)

序

本庄市出身の盲目の国学者・塙保己一は、本市が世界に誇る偉人です。塙保己一の偉大な業績である『群書類従』の編さんは、長い時間をかけて多大な努力のもとに完成された一大叢書であり、我が国を代表する文献集となっています。

保己一は幼時に失明し、盲目という大きな障害を抱えながら、多くの人々の支援のもと数々の業績を残しました。

本市では、この偉大な国学者の遺品や関係資料を公開する「塙保己一記念館」を設置していますが、この度、その顕彰活動をより充実させ、広く内外に発信するため、新たに記念館を建て替えることになりました。本書は、新記念館の開館に先立ち、塙保己一の生涯とその業績について系統だてて、分かり易くまとめたものです。これまで保己一の生涯や業績については、様々な書籍が出版され、研究も行われていますが、本書は、それらを参考にしながら、市民の皆さまをはじめ多くの方々に、保己一の類い希な業績の数々と共に、優れた人間性にも触れていただけるよう編集したものです。

本書が、郷土の偉人・塙保己一を知る上での入門書となり、保己一が氣遣った「後の世」を生きる皆さまの学びの一助となれば幸いです。



平成二十七年三月二十五日

本庄市教育委員会 教育長

勝山 勉

例言

一、本書は郷土の偉人で盲目の国学者塙保己一の生涯及びその業績等についてまとめたものである。前半は塙保己一の生涯について触れ、後半は保己一に関係する人物たちを紹介し、さらに保己一に因んだ逸話を紹介する。

一、保己一の生涯を紹介するにあたり、基本史料として保己一生前に書かれた伝記の萩野信敏著『塙勾当伝』と中山信名著『温故堂塙先生伝』を参考にしている。

一、文中で塙保己一の名前を記す場合、保己一は生涯数度名前を変えているが、本書ではあえて保己一に統一せず、改名に従って、寅之助・辰之助・千弥・保木野一・保己一と表現している。

一、本書の執筆にあたり諸学の先行研究を参考としたが、特別に記したものの以外は『温故叢誌』収録の論文や研究レポートを参考とした。

一、本書に掲載したイラストは、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー収録の書籍より引用している。

一、本書は本庄市教育委員会文化財保護課が編集し、執筆は野口泰宣（文化財保護課）が行った。

一、本書の刊行にあたって多くの方のご協力・ご助言を賜った。記して謝意としたい。

社団法人温故学会・實相寺・渋谷区教育委員会・白根記念渋谷区郷土博物館・株式会社商華堂・荒井一夫
齊藤幸一・長谷川典明

（順不同・敬称略）

目次

口 絵	
序	
例 言	
目 次	
一、はじめに	11
塙保己一の生きた時代・ふるさと保木野	
二、塙保己一の生涯	12
少年時代・江戸へ出て当道座に入門・当道座とは・衆分時代・勾当時代・検校に昇進・終焉	
三、国学への道	24
『群書類従』の編さん・和学講談所の開設と運営	
四、保己一を支えた人たち	25
保己一の師匠・保己一の門人・保己一の家族や友人たち・保己一の上司など	
五、保己一に関する逸話	35
少年時代の逸話・江戸へ出てからの逸話	
六、民話の中の塙保己一	43
検校のローソク立て・もち草摘み・寅たいじ・深谷の枯れ松	

荻野氏・塙氏略系図

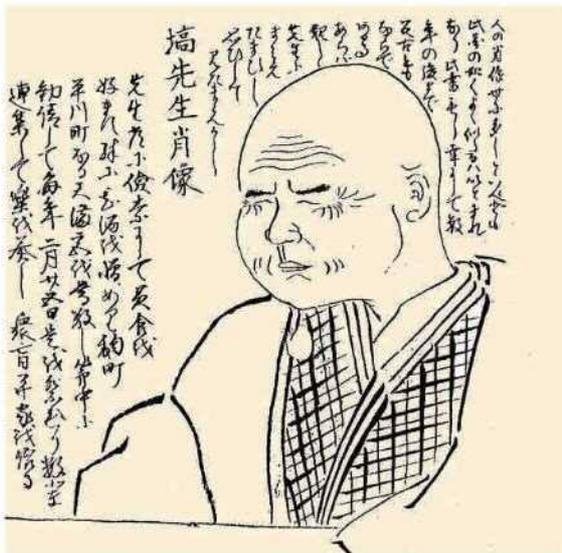
参考文献

一. よびめい

塙保己一の生きた時代

江戸時代後半に盲目の国学者として名をなした塙保己一は本庄市出身の偉人である。幼い頃に病気のため失明し、江戸に出て盲人一座の当道座に入門し、苦勞の上修業を積み出世し、さらに国学の道に進んで大成した。保己一の編さんした『群書類従』は特に有名である。

保己一の生きた時代、それは延享三年(一七四六)から文政四年(一八二二)までの七十六年間で、少年時代の宝暦年間(一七五一～一七六三)は、江戸時代中期に八代將軍吉宗が行った享保の改革の成果も薄れて、次第に幕政が行き詰まりつつあった。その後の権力者、老中田沼意次は先進的な重商主義政策を行ったが、新田開発・蝦夷地の開発、株仲間の結成など大きな成果を上げた反面、賄賂政治の横行、インフレの高まりなどの新たななる社会問題が発生し、天明の大飢饉は社会問題を増大させた。



『御伝』(塙保己一記念館所蔵)より

保己一の青年・壮年期には、反田沼勢力の攻勢により田沼意次は失脚し、老中松平定信が実権を握ると八代將軍吉宗の享保の改革に習って寛政の改革を実

行した。田沼時代のインフレ対策として、質素儉約などの緊縮政策を行い、飢饉対策では困米制度を行い、株仲間の解散、旗本・御家人保護のための棄捐令の実施、文化・文芸の抑制など、武士を保護し、商人や町民には厳しい政策となった。

保己一の晩年は、いわゆる化政期(文化文政年間(一八〇四～一八三〇))とも呼ばれる時代で、松平定信の辞任後、十一代將軍家斉治下の幕藩体制の動揺期であったが、世相は平穏な時代で幕政の綱紀が緩み、江戸を中心に太平の享樂的風潮がみなぎり、町人文化が栄えた。十返舎一九・式亭三馬・曲亭馬琴・大田南畝・葛飾北斎・安藤広重・渡辺崋山などのすぐれた文人が出現し活躍した。

江戸時代の後半という時代は、太平の時代ではあったが、多くの社会問題を抱えた時代でもあった。塙保己一は盲人一座の当道座に属し、また国学者として活躍した。幕府は保己一の生きた前半では比較的に自由な氣風を許容し、中盤には改革を実行して文化面でも厳しく取り締まったが、幕府の立て直し、旗本・御家人層の教育といった分野で保己一の国学を利用した。終盤では、幕府の統制が大幅に緩み、再び自由な世の中となり文化が発展する時代となり、保己一の活動にも制約が少なかったのではないだろうか。

本書の執筆にあたり塙保己一関連の伝記や関連書籍を参照したが、その中でも、最も重要なものは萩野信敏著『塙勾当伝』と、門人中山信名著『温古堂塙先生伝』である。いずれも保己一存生の時に書かれたもので、注記などの書き込みなどを除けば、それなりに信頼の置けるものと考えられる。保己一の伝記類は多くあるが、太田善麿『塙保己一』(人物叢書)や埼玉県徳育資料第一集『塙檢校詳傳』(以降『塙檢校詳傳』と略す)及び同書所収の「塙前総檢校年譜」などが参考となるだろう。

ふるさと保木野

保己一の生まれた場所は武蔵国児玉郡保木野村(現本庄市児玉町保木野)である。東西に傾いた南北に細長い形の旧児玉郡のほぼ中央に位置し、平坦な地形上にある村で、村の北側に集落が広がっていた。村に九郷用水が流れ、水田と畑が広がり、江戸時代後半には養蚕も盛んな地域であった。その集落のほぼ中央に保己一が生まれた生家がある。国の指定史跡となっており、生家の西側の公園(塙保己一公園)内に、塙保己一の墓と、没後百年記念で建てられた記念碑が建っている。その北隣には保己一が子供時代に遊んだり、住職より教えを受けたと思われる龍清寺があり、龍が空に飛び上がる



生家付近(本庄市児玉町保木野)

ような形をした古木のカヤ(飛龍のカヤ、市指定天然記念物)があり、その南側には母が病氣平癒を祈願した三日月不動がある。公園の南側の集落の端には村の鎮守の御霊稻荷神社が鎮座している。江戸時代の保木野村は村高が二二三石余りで、戸数は五〇戸余り、領主は旗本の永島氏一給の知行地であった。

一. 塙保己一の生涯

少年時代

塙保己一の生涯について、中山信名著『温故堂塙先生伝』(以降、『塙先生伝』と略す)をもとに、他の伝記類や先行諸研究の成果を、さらに『塙前総検校年譜』を参考として、その概要を述べる。

保己一は延享三年(一七四六)五月五日に武蔵国児玉郡保木野村(現在の本庄市児玉町保木野)の農家の子として生まれる。幼名は寅之助。父は荻野宇兵衛、母はきよ(賀美郡藤木戸村(現在は上里町)の名主齊藤理左衛門の娘)。保己一の生家は、武蔵七党横山党の一族で荻野氏の後裔といわれる。保己一の門人の中山信名が著した『塙先生伝』には、「元和の乱に、荻野某は難波の城(大坂城)にこもり、事果て後故郷なれば武蔵にかへり、保木野村に隠れ住めり」と記していて、保己一の先祖が大坂冬の陣の際には豊臣方で大坂城落



「塙保己一物語」(平成2年)より

城後に武蔵国保木野村に隠れ住んだとしている。その際には胃割と名付けた三尺ばかりの太刀を所持していたが、現在は失われたとしている。さらに代を重ねて宇兵衛の代に至り、これが保己一の父親であるが、宇兵衛について信名は「宇兵衛、生質陰徳を好み、人の為にはあへて身をかへりみず、人もし疫疾病病などやむ者あれば、親戚さへも病

の傳轉を恐れて、近づく者も稀なる習なるに、あへて厭ふ事なく、自ら其家に行っても扱ひ、養療を加へしかば、夫が為に助かる者多かりけり」とあり、病弱な保己一を支えた母きよと共に人格者であったことがわかる。

寅之助の幼少期は体が弱く、五歳の時に肝の病を発病し、そのため七歳の時に失明する。両親は親類よりの勧めで運氣を変え、そのため名を辰之助と改める。なお、保己一の伝記類では、五歳の時に失明したとするものが多いが、これは病気がちな保己一の運氣を変え、歳二つを減じて辰の年に生まれたことにし、名を辰之助としたことに由来する。

少年時代のことは殆ど伝えられていないが、先の『塙先生伝』によれば、隣村池田村の修験者の正覚坊が多門坊と名付けたともいう。保己一はまだ目が見えたときより木草の花を好み、野辺に出て数種の野草を取ってきて庭に植えて楽しんだといい、失明後も花の咲く木や草を庭に植えて、それを見て喜ぶ人を見るのが好きだったという。

宝暦七年(一七五七)は、辰之助にとって一番大切な人を失った年であった。辰之助が十二歳の夏の頃に母を失った。辰之助の嘆きは尋常ならざる様子だったという。辰之助の心に受けた傷は極めて大きかったと思われるが、次第にこの頃より江戸に出ることを考え始めた。

『塙先生伝』には辰之助が江戸へ出る動機として次のような逸話を載せている。「ある人が話すのを聞いたところ、当時、名前は知らないが、『太平記』の一部を暗唱して、江戸で色々な家に入入りし有名になった者がいると。大人(保己一)は心の中でこう思ったという。太平記は全部で四十巻に過ぎない。これを覚えて有名になり、妻子を養うことが出来るのなら、自分でも出来るだろう」。このことで辰之助は益々江戸へ出る気持ちを強くしたという。

コラム① 塙保己一の遺品 巾着とお宝箱

塙保己一記念館には塙保己一の遺品が多く收藏されている。その中でも代表的なものに「巾着」と「お宝箱」がある。

「巾着」は辰之助(保己一)が江戸へ出るとき、大切に持っていたもので、この中に銭二十三文を入れていたという。この巾着は母の帯の生地から作ったもので母手縫いの遺品である。阪本百次郎「塙保己一先生」には「母が在世の折に、縫って与えた巾着に、僅かの路用を入れて、腰に着け」とある。「お宝箱」は、木製の素麺箱で、林大学頭が大切なものだから「お宝箱」と命名してくれたという。杉本文太郎「塙保己一」には、「出立する折、衣替の着物などは悉く素麺箱に収めて、背負わせた」とあり、阪本百次郎「塙保己一先生」では「背には、素麺箱の中に、少しばかりの着換を入れた風呂敷包みを負い」とある。記念館に伝わる保己一の遺品が、後世に作られた保己一の伝記にも取り入れられているのである。

江戸へ出て当道座入門

宝暦十年(一七六〇)に辰之助は絹商人に連れられて江戸へ出る。四谷西念寺横町の雨富検校須賀一に弟子入りし、千弥と名を改め修行を始める。『塙先生伝』では注書で、絹商人の根岸某に連れられて、途中で出世比べをしようと話し合ったとし、この絹商人は後に御家人株を買って武士となり、出世して江戸町奉行になった根岸肥前守であったとの逸話を載せているが、江戸町奉行根岸肥前守鎮衛は実在の名奉行で、彼にはそのような経歴はないので、誰かが偉人伝を補強するために創作したものであろう。



「塙保己一物語」(平成2年)より

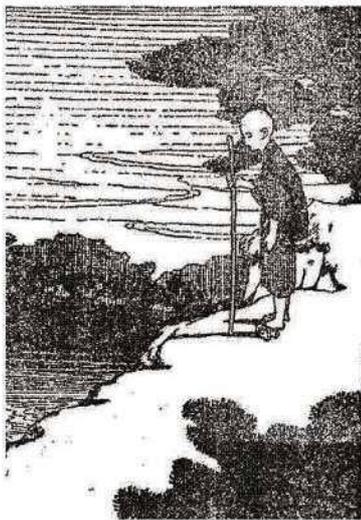
辰之助が江戸へ出た時の年齢は多くの書で十三歳の時としているが、生年を二つ減じたとしているので実際は十五歳の時となる。十三歳の時に江戸へ出て、十五歳で雨富検校へ入門したとする伝記類は、入門までの二年間の取り扱いで、旗本の東条源右衛門や高井山城守など後に保己一と関係のあった旗本の屋敷に世話になったと記して、帳尻を合わせているのである。

保己一の入った社会は、目の不自由な人たちの相互扶助組織ともいえる盲人一座で「当道座」と呼ばれていた。当道座の起源は古く、鎌倉時代に盲人達が「平家物語」を語り、室町時代に至って、足利將軍家の一族より出た検校明石覚一が幕府の庇護の元、当道座を作ったとも言われている。当道座は江戸時代になっても幕府より庇護され、寺社奉行の管理下に置かれた。組織が整備され、京都に職屋敷が置かれ、総検校が当道座を支配した。組織は「四官十六階七十三刻」といわれ、七十三もの階級が設けられていた。当道座では、平曲・三曲・鍼灸・按摩などをほぼ独占的な生業とした。また高利貸しが認められており、後には社会問題にも発展している。ほかにも塙保己一のように学問の道に進む者や棋士になった者もいた。

辰之助は当道座に入り、名前を千弥と改めたという。当道座では

初心・打掛けという身分で修行を開始した。しかしながら技術の習得は芳しくなかったという。

『塙先生伝』では、「雨富は三弦を千弥に教えたが、三年学んでも一曲も覚えられなかった。やむを得ず針治の術のみに絞ったが、医書などを読ませると二度目には一字一句間違わずに覚えた」とある。さらに「千弥(保己一)はもとより文章を読むことを根本としていたので、修行には心そこにあらずの状態で、暇を見ては文を読むことに専念した」とある。著者の中山信名は師匠の伝記なので、千弥が音楽は覚えられなかったが、鍼灸・按摩等の才能がないとは書いていない。逆に学問に思い入れが強かったので真剣に修行をしなかったと書いているのである。この点については、各種伝記類では数年修行しても何一つ習得できなかったと書いているものが多い。例外的に、温故学会所蔵の『温古先生伝』のみ「鍼術をまなひけるにすこふるその妙をえたり」とあり、三味線は三年学んだが何一つ得られなかったが、鍼術を習得したとしている。いずれにしても千弥にとつてこれらの修行は苦痛だったものと思われ、実際に苦手としていたのであろう。



大瀧正寛「人の行く道」
大正13年

千弥は修行の進み具合に苦悩し自殺を考えたという。長沼依山『塙保己一伝』では、「自分ながら、不がいなさに泣いて、死を決したことも一度や二度ではなかった。思いあまって、九段の牛が淵に身を投げようとして、人に救われたのもこのころであった」と書かれている。

師の雨富検校は千弥に盲人として生きていくための技能を教えようと努力したが、その成果は芳しくなく、文章を読み覚え考ええるという特技を見いだしたのである。『塙先生伝』では師匠の雨富検校は、「私が教えたもの何一つ習得できないが、師匠は弟子が生活で生きるように指導するのが務めである。千弥が好まないものまで無理強いするものではない、賊と博(盗賊と博打打ちの意)以外ならやりたいことがあればやりなさい。これより三年間汝を私が養う。しかし三年たっても為すことがなければ国元へ返す」と言ったという。ここでは学問の道へ進めとはいっておらず、好きなことをやりなさいと言っている。とはいえ、千弥は書を読むことに邁進するのである。もちろん千弥は目が見えないので自分では本を読むことはかなわず、必ず誰かに本を読んでもらわねばならなかった。これについては、既に述べたが、松平乗尹の場合と同じように、千弥の才能に氣付いたものが多くいたと思われ、本を読んでもらえる機会が多くあったのであろう。明治四十一年(一九〇八)刊の破魔禅著『偉人修養史』の塙保己一の項では、「或る時数銭を投じて、坊間の冊子を購ひ、人の肩背を按摩しつつ、其人に請ふて読ましめ」とある。

雨富検校は学問の道ならば千弥に合っていると見抜き、新たな修行の方法を考え、宝暦十一年(一七六一)、十六歳の時、当時有名であった歌学者の百華庵萩原宗固に入門させた。さらに神道や外国の書籍を学ぶために川島貴林に、律令は山岡浚明(妙阿)に、医書は品川東善寺の僧孝首座に学ばせたという。また雨富検校の隣家松平乗尹は、千弥の秀才を認めて特別に本を読んで聞かせてくれたという。大正八年(一九一九)刊の『賢哲傳』には、「高井山城守の妾某女の許へ、大人少年の折常に按摩に通ひしが、その療治代にとて和書を読聞せられたり」とある。

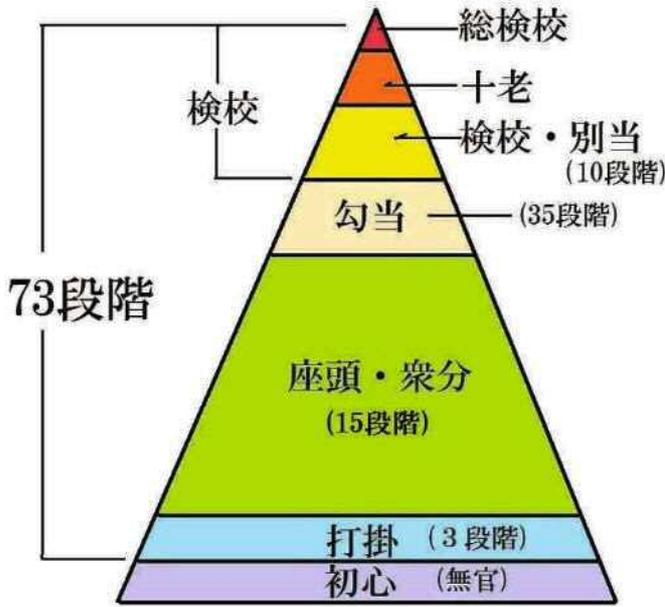
コラム② 不器用だった千弥(保己一)

当道座に入った辰之助は千弥と名前を変えて修行を開始した。三弦や鍼術は師の雨富検校に習った。しかし三弦は三年習っても一曲も覚えられず、やむを得ず鍼術のみ習ったが、中々上達しなかったという。保己一が不器用だったという逸話はいくつか残されている。その一つに「修業時代にある旗本の屋敷に按摩に行つた帰りに、千弥を可愛がつてくれる奥方が、外の家で食事を貰うのは止めなさい。握り箸でご飯を食べ散らかすのを見て心配してくれたのだった。帰りに食べやすいものを持たせてくれたそうである。」また、千弥の歩く姿を見ると、杖を引いてふらふらと歩く姿が危ういという。これも千弥が不器用だったことを示す逸話なのだろう。抜群の記憶力と忍耐力、さらに強い意志を持った保己一も少年時代はそれなりの苦勞を強いられていたのである。

当道座とは

当道座は、盲人の自治的相互扶助組織で、その起源は古代に遡り、平安時代の前期、仁明天皇の第四皇子の琵琶の名手であった人康親王が病氣のため失明した。親王没後、側に使えた人を検校や勾当に任命されたことが当道の起こりという。鎌倉時代になり『平家物語』が流行し、演奏する盲人が増加した。室町時代になって検校明石覚一が幕府の庇護のもと当道座を開いたという。江戸時代になり、当道座は幕府から公認され寺社奉行の支配下に置かれた。当道座は京都に職屋敷を置き、総検校が組織を統轄した。江戸の都市の発展と

当道座の組織階級概念図



ともにも盲人が増加し、江戸に惣禄屋敷を置いて関八州を支配した。当道座は江戸時代に組織が整備され、盲人の位盲官が整備された。当道座は位階が七三段階もあるといわれ、入門すると「初心」と呼ばれ、次に「打掛」という位に進む。これは三階級あり、次が「座頭」となる。盲人社会ではこの階層の人口が最も多い。座頭は一五段階があり、最初の才職衆分から始まり、一度から四度まで、さらにその中でも細かく分かれている。最上位の「四度の晴」を超えると「勾当」となる。勾当も一度から八度まで分かれ、それぞれ細かい階級があり、合わせて三五段階もある。その上が「別当」であり権別当・正別当・惣別当の三階級であるが、さらにその中が細かく分かれ十段階もある。別当は検校に進ずる階級のようにある。検校は検校任じ・上衆引・中老引・晴の四段階がある。ここまでには官金と呼ばれる上納金で昇進できる階級である。晴の検校に昇進した者の上位十人を「十老」と呼び、その

最高位の一老が総検校である。このように当道座は厳しい階級社会を構成しているが、入門して総検校まで昇進できるものはほんの一握りの者だけで、多くは座頭(衆分)で終わるといふ。勾当上位にもなれば弟子を持ち、十二分に生活は維持できたと思われる。幕府はこのような厳しい組織の中で、昇進が難しい現状を鑑みて、官金という特別な制度を許可し、お金で官位を買うことを許可した。入門して初心となり、都合七一九両官金を収めれば「晴の検校」まで昇進できるといふのである。財力のある者は一夜にして検校になったという話もあるのはそのためである。実際に数百両も集めて検校まで昇進することは困難であった。保己一が勾当に昇進する際に師の雨富検校が百両貯めておいてくれたといい、外にも百両用立てて都合二百両で勾当に昇進した。どんなに優秀な盲人でも昇進するためにはお金が必要であったのである。

この様なシステムはある意味では必要な方法であったが、盲人が仕事とした鍼・灸・按摩・音曲などの本来の仕事で金銭を蓄えることはかなり難しく、幕府はもう一つの特権を盲人社会に認めていたのである。それは高利貸しであり、多くの盲人が金融業を行っていた。しかしながら本業より儲かる高利貸しを本業とし悪質な取立をする者が増加し社会問題化した。幕府も取締を行ったが、法の抜け道を見つけて行う者が増えた。そのため老中松平定信は、寛政の改革の一環として、当道座から二名の検校を選んで取締役に任命して改革を行わせている。二人の内の一人が塙保己一であった。

検校に昇進した保己一の仕事の一つは弟子の昇進に関わることである。写真の告文は保己一の弟子座頭守の一(保佐二に改名)が萩の上衆引(一度の上衆引)に昇格した時の告文である。通常は江戸の座頭などが昇格する場合、江戸の師匠(検校)を通して、京都の総検校



塙総検校の告文（塙保己一記念館所蔵）

に依頼する形をとるが、保己一が総検校の時には江戸在住であるから、直接総検校が告文を発給したのであろう（上写真）。保己一が検校になったときには、師匠の雨富検校が引退して、京都の総検校に取り次がないため、同宿と呼ばれる雨富検校と同門の師匠中浦検校を頼み、岸部検校が告文を発給し、京都の吉村総検校が奥印しているのである。

衆分時代

宝暦十三年（一七六三）、十八才にして千弥は衆分の位に昇格し、名を故郷の保木野村に因んで保木野一と改める。衆分は当道座の七三もの階級の内、大きく分けた四官の内、検校・別当・勾当・座頭の四番目の座頭の官位に相当し、衆分はその座頭が十五の階級に分かれていてその一番最初（一番下）の階級にあたる。衆分の下に打掛が三階級あり、その下に初心があるから、盲人一座では相当の出世といえる。なお、『塙先生伝』には千弥が衆分になるに当たって、「千日の間、一日に百巻の本を読むことを誓い、その力量があれば達成できる」と信じ、実際衆分に昇格したのである。

明和二年（一七六五）、この年、保木野一の故郷武蔵国児玉郡保木野村の生家を継いだ弟の卯右衛門が病気のため亡くなった。まだ十代後半の若さであった。卯右衛門には娘がおり、父宇兵衛は保木野村の近くの上真下村の片貝氏から弥七という婿養子を取って跡を継がせている。

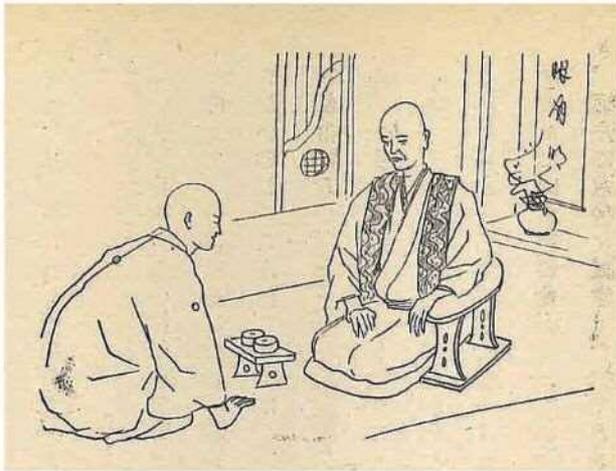
雨富検校は保木野一の昇進を大いに喜んだが、まだ一つ大きな気がかりがあった。それは保木野一の体が弱く病気がちだったからである。これまで保木野一の体を気遣い何とか丈夫になるように努めてきたが特別進歩はなかったのである。雨富検校はここで大きな賭に出たのである。保木野一を呼んで言うには、「これから為すことがあるという人は、病が多くては為すことは叶わない。病のある人が旅をすると、まま治ることがあるという。汝の病も同様ではないか、今私がここに五両を用意したので、私の代わりに伊勢神宮の代参をしないさい。雨が降る日は行ってはいけない。必ず悪しき気は受けてはならない。費用が余れば違うところへも行ってみなさい。費用がなくなったら帰ってきなさい。」と言ったという。

明和三年（一七六六）の春、二十一才の時に保木野一は師匠の教えに従い父宇兵衛と一緒に伊勢詣りに旅立った。旅は伊勢参宮から、京都に向かい難波・播磨へ行き須磨明石浦まで行って難波に戻り、そこから堺をへて高野山に行き、その後大和へ向かい南都を巡礼して江戸に帰ったという。六十余日にも及ぶ旅となった。保木野一は旅から帰ると見違えるように元気になり、病気は快癒し、『塙先生伝』の著者信名も「果たして雨富の言のごと、病はみな癒えたりき、



大野武男「少年塙保己一伝」昭和4年

いとあやしきことになん」と書いてある。ここでいう「あやしき」とは、不思議なという意味であろう。以後、塙保己一が病気になったという話は



長沼依山『塙保己一伝』(昭和31年)より

等を学んだが、僅か半年にして真淵が死去したため永く学ぶことは叶わなかった。しかしながら宗固・真淵という巨匠からの教えは、この後の国学者塙保己一にとつてかけがえのないものだったに違いない。

この頃の逸話の一つに同じ衆分であった豊一の話がある。この逸話は、『塙勾当伝』・『塙先生伝』両方に載せられている。その内容は『塙

亡くなる直前まで出てこないで、丈夫な体になったのである。

明和六年(一七六九)三月、師匠の萩原宗固は弟子の保木野一と横田茂語(孫兵衛)を呼んでこういったという。「汝らは、その年頃にしては読書・詠歌は人よりも優れている。将来はその道の専門家になるだろう。しかしながら人それぞれ得意な分野がある。これよりさらに学ばなければならぬ。茂語は歌を中心に学び読書はそれに次いで学べ、保木野一は歌を詠むのはやめて専ら文を読め。しかし優れた人に学ばなければ進歩はない」と言い、さらに「賀茂真淵は今尤も知られた国学者だからこれに付いて学べ、但し、私について学んだことは隠し通しなさい。学流が違えば隔心が生じる場合がある」と。宗固は保木野一と横田茂語という二人の優秀な弟子の才能を見抜き、的確なアドバイスを与えているのである。この後、当時名声の高かった国学者賀茂真淵に入門するのである。真淵からは六国史

勾当伝』では、「豊一は金貸しで財産を築き、師を辞して一家を成し、妻子を持って楽しんだが、数年で病死したという。豊一は円金五百斤と家財を残した。ある人は、保己一に、まさに法弟なのだから相続すれば、利息だけでも三百斤は稼げる。さらに人に詔つて鍼や灸をやる必要はないと勧めた。しかしながら保木野一は、渴すれど盗泉の水は飲まずと、この話を受けず、さらに自分は貧しいといえども、人の死を利用して稼いだり、その人の資財を奪つて妻子を飢えさせることはしない」と書いてある。『塙勾当伝』より遅く成立した『塙先生伝』では、「同じ衆分で財産を築いた豊一という者が、急に病で死んだ。しかしそれを引き継ぐ者もないので、ある方が師匠の雨富検校に、保木野一に豊一の跡を継がせてどうかと薦めてきた。雨富検校も良い話と保木野一に相続の話をしたところ、保木野一は豊一が生きていた頃、自分とはそりが合わず、そのような者の財産を引き継ぐ謂われはないと断つたという。そのくらいの財産ならば、今後稼ぐことは可能であると。師の雨富検校も納得したという。」とあつて若干の違いがある。『塙勾当伝』では豊一には妻子があり、保己一が相続する理由は「法弟」だからとする。『塙先生伝』では妻子はないとし、相続する者がないので保木野一にと話が来たとする。『塙勾当伝』には雨富検校の名も出ていないのである。この逸話は実際にあつた話であろうが、信名が『塙勾当伝』を読んだかどうかは不明だが、あつさりまとめている。保木野一は衆分であり、この後、さらに上の位に昇るためには多額の費用が必要となるのであるが、敢えて断つたのである。『塙勾当伝』の方が「貸金と妻子」という二つの要件で考えても、保己一が受けなかつた理由になりやすいし、『塙先生伝』の「そりが合わなかつた」という理由はあまりにも弱いだろう。

勾当時代

保木野一の学問も進み、江戸での名声も広がりつつあった頃、師の雨富検校は保木野一を呼んで話をした。「近頃、当道座では芸の善し悪しで出世するのではなく、金を積んで出世する者が多い。おまえは学問は既に人に抜きん出たが、これからは出世を考えねばならない。私がお前のために金百両を蓄えたので、これで序を進めよ。」と、保木野一のために百両もの大金を出してくれた。そのおかげで安永四年（一七七五）正月に勾当の位に昇進する。三十才の時であった。姓を塙と改め、名も保己一に改める。『塙勾当伝』はこの数年後に書かれたものである。

勾当の位といっても、最も低位の「一度の過銭の勾当」から最高位の勾当の「八度の権勾当の晴」までは実に三五段階もの位があった。勾当職をすべて通過するには二八二両のお金がかかったという。お金で昇進できる最高位が「検校の晴」でここまで都合七一九両が必要となる。保己一が衆分時代一五階級のどの位置にいたのかは不明だが、仮に最も低位の「才職衆分」として、勾当の最も低い「過銭勾当」になるのに一六三両を要した。保己一が中級の座頭であれば、師の与えた百両で勾当の位に上れたのである。保己一は豊一の遺産相続を断った件でも、保己一は昇進にあたって何とか



平河天満宮

なると考えたようで、おそらくは百両程度は工面できる自信があったのではないか。『塙勾当伝』

では勾当昇進に当たって友人が二百両集めたと書いている。昇進に当たっては保己一の友人や知人らの援助もあったようである。恐らくは大田南畝らが工面したのではないか。

保己一は勾当の位に昇る以前に、自ら勾当になりたい旨、天満宮に祈願していたという。火のものを絶ち、般若心経百巻を千日間誦するとした。この天満宮とは平河天神のことで、日参して祈願したという。結果、九百日にして勾当の位に上がったと言われている。

信心の厚い保己一は勾当に昇進できたのはこの祈願の賜とし、さらに検校昇進のため二千日間の読誦の祈願を成したという。しかしながらこの事は保己一個人の事であった。なお異説として、温故学会所蔵の『温古先生伝』では、「心経読誦の祈願は、衆分昇進祈願が千日、勾当昇進祈願が二千日とし、満了日に祈願が叶ったとし、検校昇進祈願もしようとしたが心に思うことがあって止めた」という。



群書類従の一部（塙保己一記念館所蔵）

なお、この年、保己一は師匠の雨富検校の家を出て高井山城守の家に転居した。理由は不明であるが、勾当に上がったのを機に、独立したものであろうか。

安永八年（一七七九）、保己一が三十四才の時、世のため後のために、『群書類従』という一大叢書の編さんを決意し、元日よ

り天満宮に般若心経百万遍読誦し、開版成就の祈願をした。各地に散らばる貴重な書物を集めて、版木を起こして出版するこの事業は、国学の研究者の為に配慮した一大編さん事業であった。保己一の『群

書類従』編さんの直接の動機については不明であるが、保己一が国学を学んでいく上で直接大きな壁にぶつかったのは古書の収集ではなかったか。貴重な書物は大名家や京都の貴族、京や大和の大寺社に秘蔵されていて、なかなか見ることが出来なかった。だからこそ一大叢書に編集して流布を目指したのではなかったか。保己一の活動の中で、幕府や御三家との付き合いを見ると、貴重な書物を見るためのつながりを大切にされたものである。この年、高井山城守の屋敷から出て、東条信濃守の宅地に移転したという。理由は不明であるが、おそらくは保己一の許を訪れる客が増加したことや、いよいよ『群書類従』編さんのための作業場のなものが必要となり、手狭となったことなどが理由としてあったのではないか。実際、『群書類従』の予行版となった『今物語』の編さんが始まっていくのである。

天明二年（一七八二）、三十七才にて紀伊家の医師東条清民の女を妻に迎えたという。この婚姻に至る経緯については不明である。

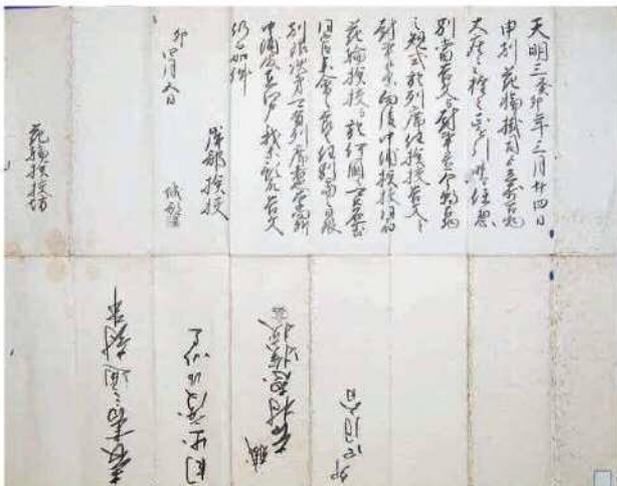
コラム③ 塙保己一の検校昇進の告文

塙保己一記念館には保己一が検校に昇進したときの告文がある。それによれば、三月二十四日、保己一は勾当の位の中の掛司・立寄・召物・大座（初の大座）・大座（後の大座）・権（権勾当）・権（権別当）・正（正別当）を経て別当の位の最上位の総別当の晴に昇進し、引き続き検校の位に就いた。折紙形式の告文で、四月七日付の岸部検校城郡が差し出しで、裏書（奥印）は吉村惣検校である。宛名は「花輪検校」とあるが、耳で聞いた筆者が書き間違えたものだろう。この告文は勾当から検校まで昇進するにも、その間にいくつもの階級が含まれているのがわかる。

検校に昇進

天明三年（一七八三）、三十八才の時に保己一は検校に昇進する。保己一は勾当に昇進する際に、事前に天満宮に昇進を祈願している。また昇進にかかった経費の内百両を師匠雨富検校が用立ててくれたことは既に述べた。検校昇進については天満宮に祈願したとも、私的なことなどで祈願を止めたともいわれているが、定かではない。また昇進にかかった経費についても明らかではない。ただ保己一も当然ながら検校昇進を望んでいたであろうし、それなりの計画もあったものと思われる。またこの年の三月に保己一の娘が出生している。

翌年、和歌の師匠萩原宗固は保己一を呼んで和歌について日野資枝について学ぶよう勧めたという。以前、宗固は保己一に和歌より文を読むことを勧めたが、再び和歌を学ぶよう勧めた理由は不明である。しかしながら保己一



検校昇進時の告文（コラム③参照）

が編さんする『群書類従』に収められた和歌関係の書物の量の多さを考えると、日本の古代史を考える上で朝廷と和歌の関係は極めて深い関係にあるので、宗固は学力の高まった保己一が次の段階に進む頃と考えていたのかもしれない。保己一は日野資枝没後は閑院宮・外山光実らに学んだという（『塙先生伝』）。

天明四年（一七八四）、師の雨富検校が没する。雨富検校が亡くなる直前に保己一を枕元に呼び、師の財産すべてを保己一に譲ろうとしたが、保己一は既に貰うものはすべていただいております、これ以上貰うものはないと固辞し、他の弟子達に譲ってほしいと頼んだという。

保己一が勾当になったとき、在名を名乗ることが出来たが、保己一の本姓荻野は、既に同名の検校がいたため名乗れなかった。師の本姓である塙姓を選んだのも師恩に報いるためであった。

この年、保己一は初めて水戸藩主徳川治保（はるもり・文公）に拝謁を許される。これは知り合いの水戸藩彰考館学者の立原万（翠軒）の推挙と考えられる。保己一と立原万との出会いは、『塙先生伝』によれば、保己一が門弟の屋代弘賢の家を訪れたときに出会ったという。そこで御願文の作者が、後伏見院か花園院かで議論となったが、決め手がなく議論は膠着状態となっていた。保己一は一通り御願文を読ませて、花園院の作と断じた。銘文からその理由を説明すると、そこに居合わせたものは一同感じ入ったという。立原も感心したが、以前から保己一の高名は聞こえており、今回の件で実際に保己一の学力の高さを感じ入り、水戸藩の『大日本史』の校正を保己一に依頼する決意をしたのである。しかしながら藩内より反対が起こることを予想し、まず『源平盛衰記』を校正させて、その実力を示させようを取り計らい、さらに長慶天皇の即位をめぐる問題について検討させ、保己一は「花咲松」を書いてそれに応えた。水戸藩内では水戸光圀公以来の国史編さん事業を障害者に委ねることを恥とすべしとの意見が多く出たが、立原は盲目は病気のせいであり、その人の尊卑に関わることはない。さらに世間では盲人の身分が低い、塙は文学を業とし、師として仰ぐ人も多く、塙の説も取り入れるものが

多い。目が見える見えないうで差別してはならないと説き、さらに国史の編さんに従事させ得ることがなければ自分が責任を取るとして反対者の意見を封じたのである。その後、その結果を持って立原は文公（徳川治保）に塙保己一を引き合わせた。この時、保己一は月俸五人扶持を賜った。これ以来塙保己一の評価はさらに高まり、世間にその名が広まっていった。これ以後、保己一は江戸の諸大名の家に出入りすることが許されたようである。その後、『大日本史』の校正の功として月俸十人扶持を給わった。なお、この年故ありて妻と離別することとなった。



裏六番町の土地割り図（塙保己一記念館所蔵）

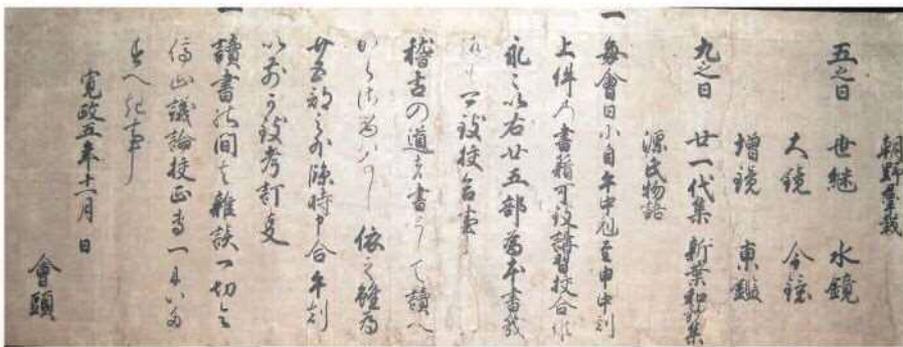
天明六年（一七八六）、四十一年の時に『群書類従』の予行出版ともいわれる『今物語』を刊行する。

寛政四年（一七九二）、麻布の筭橋の袂より出火し、江戸の町の大半が焼ける大火となった。保己一の住んでいた表四番町の屋敷も焼け、しばらくの間、保己一はお茶の水の旗本大屋四郎兵衛の屋敷に仮住まいした。その折、上野国出身で学者でもあった修験

者の常照院（浄聖院）が度々保己一のもとを訪ね、保己一に「今の世は文道が盛んで経書を読む者は多い、神道・歌道についても専門とする家が定まっているが、歴史や律令を読む者がいないことは嘆かわしい。幕府に願い出て地所を借り講談所を建ててはどうか」と勧めた

という。保己一もこの意見を取り入れて翌年に幕府に願ひ出た。

寛政五年（二七九三）二月、保己一は早速、和学講談所と文庫の設立と借地について寺社奉行脇坂淡路守に願ひ出る。四月には許可が出て、場所を探すように申し渡された。五月末には裏六番町の小普請組小泉新三郎の土地六百坪の内三百坪を幕府に願ひ出て七月に許可された。八月五日には保己一は名代として門人高橋市五郎の名で受取書を提出している。土地を受け取るとすぐに普請にかかり、

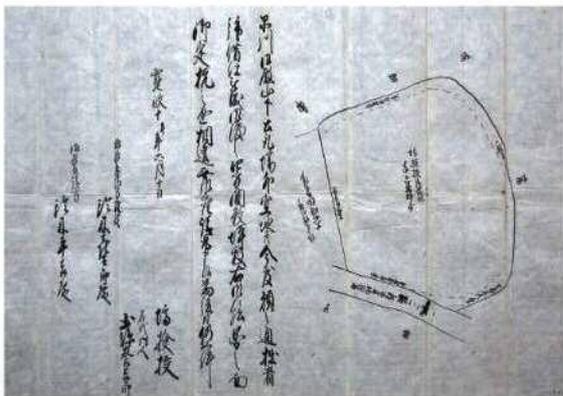


寛政5年の和学講談所規律書（塙保己一記念館所蔵）

十一月八日に完成して移り住む。同年十一月付で講談所は規律書を作成して、運営の取り決めとしている。

寛政六年（二七九四）、保己一は寺社奉行より座中取締役（一座取締役）に任命される。これは幕府の行った寛政の改革の一環で、当時社会問題化していた当道座の貸し金問題を改革するために、塙檢校と藤植檢校の二人が命じられたのである。当道座は障害者自治相互扶助組織でもあったので、幕府は保護政策の一つとして特別に高利貸しを認めていた。当道座では七三段階もの官位があり、昇進するために多額の金子がかかることは既に述べた。幕府はこの官位をある一定額の金で昇格することを認め、その金を当道座に配分して、盲人の昇格費用に当てようとした。だから金のある者は若

くして檢校になれたのである。当道座の本分は、音曲・鍼・灸・按摩などであったが、本分を忘れて貸金業に走る者が増加し、その取り立ての悪辣さは社会問題に発展した。幕府も取り締まりには苦慮したが、明和二年（二七六五）十二月に大檢挙を実施し、この時には檢校八人・勾当二人・座頭一人の十人が檢挙されたという。しかしながらその後も沈静化することなく問題は激化し、幕府は当道座の中で改革を任せられる檢校二人（塙檢校と藤植檢校）を選んで座中取締役に任じたのである。保己一は取締役に就任すると早速改革を行ったが、まずは座法の改正を行い、十老以上の者の不正問題、欠官不座となったものが復権する場合の規則作りなどを行った。貸し金問題では、取り締まりから逃れるため巧みに法の抜け道を見つけていた座頭らの不正を防ぐため、たとえば裁判となった場合には正当な貸し金である証明として惣禄檢校の奥印を要求するなど改革に努めている。なお保己一が取締役に任命されたとき、江戸には六十人ほど



品川御殿山の敷地図（塙保己一記念館所蔵）

檢校がいたといい、保己一はその末席に位置していたとも言う。この年の九月、保己一は一座取締御用のため上京した。

寛政七年（二七九五）正月、温古堂塾中法度が作成される。二月、郷里保木野村の父宇兵衛が死去したという。九月には幕府より講談所の運営経費にと町屋敷を賜り、その家賃金五十両を収入とする。この年の秋に保己一は上京する。十二月には幕府に『群書類従』の一

部を献上した功として白銀十枚賜る。

寛政十年(二七九八)五月、幕府より『群書類従』の版木倉庫建設のため品川御殿山下の敷地一〇六〇坪を拝借する。

寛政十一年(二七九九)五月、保己一は座中取締役辞任を幕府に願ひ出て願ひの通り許可され、褒美として白銀二十枚拝領した。これは和学講談所の運営が忙しくなったこと、『群書類従』の編さんに本腰を入れるためだったと思われる。およそ五年間、座中取締役を勤めたが、ある程度成果を上げ、先の道筋が見えたことから辞任したものである。

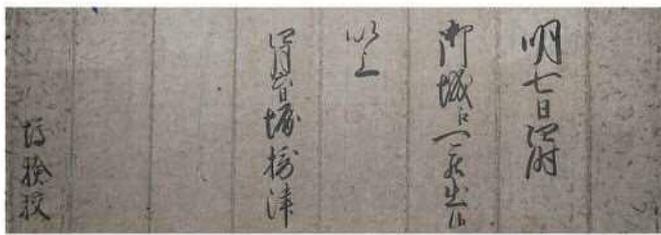
この頃までに、『孝義録』・『日本後記』(十冊)・『令義解』・『百練抄』の校正から版木の開板へと作業が進んだ。

寛政十二年(一八〇〇)十二月二十日、五十五才で保己一は総晴の検校に昇進する。これについて告文が塙保己一記念館に残されている。いわゆる検校としては最上位に位置し、以降は十老と呼ばれる上位十人の検校が当道座上位に位置している。ここからは金銭の有無に関係なく通常上位が引退したり死亡して欠員となることに上が上がっていく。

享和二年(一八〇二)、この年、次男道之助が生まれる。(翌年死去する。)

享和三年(一八〇三)正月、保己一は和学講談所が手狭になったため幕府に地所替を願ひ出る。六月、保己一は一座の惣録職に就任する。本所一つ目の惣録屋敷に移り住む。

文化元年(一八〇四)正月、和学講談所が手狭になったため幕府に



江戸城への召状 (塙保己一記念館所蔵)

地所替えの件を幕府に願ひ出る。十月、保己一は和学講談所用地の候補地を決め幕府に願ひ出る。十二月に許可が出される。

文化二年(一八〇五)正月、これまでの裏六番町の土地を幕府に返し、代わりに表六番町の土地八百四十坪の敷地を賜る。保己一は敷地内に天満宮を勧請したという。三月、三男熊太郎生まれる。

惣録職を辞任。十二月には一座の十老に列し、上京し、総検校に挨拶を行い江戸に帰る。なお、通常は十老になると京都在住が決まりだが、保己一の場合は和学講談所御用があるため特例で江戸在住となった。

文化三年(一八〇六)十一月、『史料』と『武家名目抄』の編集を開始し、『史料』は文久元年(一八六一)までに四三〇巻が完成した。

文化四年(一八〇七)十二月には、四男の次郎(忠宝、保己一の死後、和学講談所を相続する)が生まれる。

文化五年(一八〇八)六月、保己一は幕府より「史料」の取立を命じられ、御用手当として金五十兩を毎年くだされる。

文化十二年(一八一五)四月七日、保己一は十一代將軍家齊にお目見えがかない拜謁し、同月二十八日にも再び拜謁した。

文化十四年(一八一七)十二月二十五日、保己一は上京のため江戸を出立する。

文化十五年(一八一八)正月、保己一は二老に進む。昇進挨拶



文化14年道中日々記 (塙保己一記念館所蔵)

のため上京する。一月七日、京都の旅籠に着く。芝原検校・岸並検校・

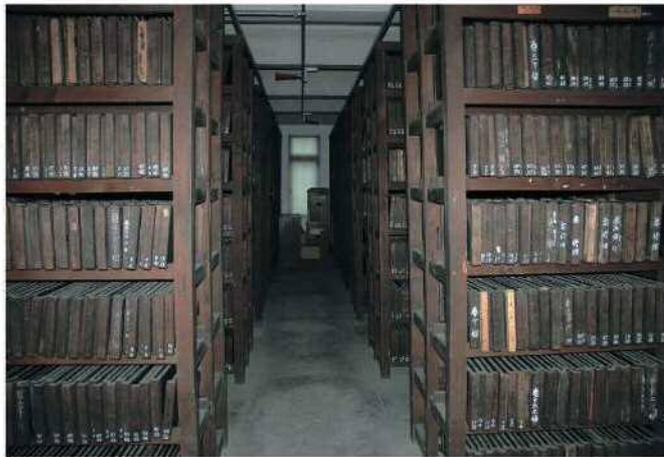


塙保己一の墓（東京都新宿区 愛染院）

文政四年（一八二一）正月、保己一は総検校相続のため上京し、二月に保己一は最高位総検校に任命される。五月には総検校就任の挨拶のため將軍家にお目見えが許され拝謁する。総検校は京都在住が慣例だが、病気を理由に江戸にとどまる。保己一は八月十八日、俄に発病し床に伏す。同月二十三日に病気を理由に総検校を辞職し隠居する。九月十二日に病気のため死去する。七十六歳であった。

終焉

服部検校が保己一を訪ねる。その後、職屋敷を訪ねる。二十二日には大坂に行く。二月三日には京都へ戻る。十日に京を出立し江戸へ向かう。二十二日に本庄宿で昼飯をとり、鴻巣宿に泊まる。文政二年（一八一九）、この年、『群書類従』六七〇冊の刊行が完了。この年の四月に再び上京する。この時は弟子の中山信名が供をしている。八日に江戸を出立し、十六日名古屋へ着く。二十三日、名古屋を出立し、二十五日、伊勢山田奉行所へ着く。数日間内宮・外宮へ行く。閏四月五日に京都に着き、暫く京・大坂で活動して、五月二十六日京を立ち六月八日日本庄宿で昼飯、熊谷宿泊る。九日に浦和宿に泊まり、十日には江戸に帰ったものと思われる。



群書類従の版木（温故学会所蔵）

『群書類従』の編さん
保己一が『群書類従』を編さんしようとしたのは、安永八年（一七七九）のことであった。安永四年（一七七五）に勾当に昇進した時には、保己一は天満宮を深く信仰し、昇進祈願をした結果、そのおかげで勾当昇進が叶ったと考えた。しかしそれは自分個人の問題であり、「世のため、後のため」になることをしたいと考えたのである。そのため以前より考えていた古書を

三 国学への道

なお、子息次郎忠宝への家督相続のため、保己一の死を秘して、翌五年七月三日、病気のため跡目相続願いを幕府に提出する。九月八日、跡目相続（和学講談所御用）の許しが出る。同月十二日、保己一死去の届け出を出す。戒名「和学院殿心眼智光大居士」
文政五年（一八二二）七月二十四日に四谷内寺町安楽寺に葬られる。後にこの寺が廃絶したため、明治三十一年（一八九八）五月に四谷の愛染院に改葬される。（※改葬の年を前年の三十年とするものがあるが、ここでは『徳育資料』「塙検校詳伝」によった。）

類従』であった。「外国には叢書と云うべきものがあることは聞いているが、我が国にはまだそういうものはない。全国各地には古書が散在しているのです、それらを集めて版木を起し印刷すれば、国学をしようとする人の助けになるに違いない」と考えた。天明六年（一七八六）に保己一は『今物語』を刊行したが、これは『群書類従』を刊行するに当たっての見本ともいわれている。これ以後、編さんを本格化させたのであろう。

和学講談所の開設と運営

和学講談所は、江戸時代後期に塙保己一が設立の建議を行って幕府によって設立された講習兼編さん所で、和学所ともいう。名称に



成沢福松作図の和学講談所復元図（一部着色）

ついては保己一が度々老中松平定信に命名を依頼し、定信は「温古堂」と名付けたという。当初は温古堂と呼ばれていたようだが、次第に正式名称は和学講談所と呼ばれるようになった。

寛政五年（一七九三）二月に、保己一が設立願書を幕府に提出し、四月に幕府より許可を得た。幕府より裏六番町（千代田区三番町十六番地付近）で三百坪の地を借地し、すぐに建物の

建設にかかり、十一月に完成して移り、和学講談会が始められた。

寛政七年（一七九五）九月には、老中の申し渡しがあり、小伝馬町ほか二箇所の町屋の拝領と町奉行より年五十両の手当てをくだされ、従来は寺社奉行所管轄だったのを林大学頭支配となり、和学所は幕府直轄の学校となった。しかし運営は保己一に一任された。なおこの後、和学講談所が手狭になったため、幕府に願ひ出て文化二年（一八〇五）に表六番町（千代田区三番町二十四番地付近）の八百四十坪余りの地に移転している。

和学講談所では和学講談会が定例となり毎月三回開催された。会頭には奈佐勝舉・屋代弘賢・横田茂語・松岡辰方の四名が担当している。

和学講談所には以下のような機能があった。

- 「古事記」や「六国史」などの日本古来の書籍を教授・会読など行う。
 - 文献資料を調査収集して書写・校訂を行う。
 - 幕府の要求に応じて資料の提出・応答・原案起草等を行う。
 - 独立採算で出版事業を行う。『群書類従』の編さん・刊行も行う。
- 塙保己一の没後は、子息次郎忠宝が跡を継いだ。幕府の崩壊に伴い、明治元年（一八六八）六月に廃止された。

四. 保己一を支えた人たち

塙保己一は江戸へ出て当道座に入門し、やがて学問の道に進み国学者として大成した。当道座でも晩年には総検校という最高位になるなど偉人と呼ぶのにふさわしい人物である。そのように塙保己一は盲目という大きなハンデを持っていながら、常人には達成できない偉業を成し遂げたのである。保己一の周りには優れた人材が集い、

保己一を若い頃より支えてくれた人も多くいた。そんな人たちの支えがあって、保己一は力量を発揮できたわけで、保己一を支えた人たちが影響を及ぼした人たちについて紹介する。

保己一の師匠

① 雨富検校須賀一あまふみけんぎょうすけいち

保己一の師匠の雨富検校須賀一は、常陸国西茨城郡市原村(茨城県笠間市友部)の百姓塙林内の長男である。幼児の時に失明し、

コラム④ 塙保己一と川柳

江戸時代に詠まれた有名な川柳の一つに「番町に過ぎたるもの二つあり、佐野の桜に塙検校」という句がある。これは番町の町自慢なのであるが、世間に誇れる佐野の桜と塙検校を詠み込んでいる。「佐野の桜」とは、旗本佐野善左衛門の屋敷にあった桜のことで、「塙検校」は塙保己一のことである。佐野の桜は花が見事であったというだけでなく、佐野善左衛門が江戸城内殿中で、時の権力者田沼意次の子の若年寄田沼山城守意知を切りつけるという事件があり、意知はこの傷が元で死亡し、善左衛門は切腹となった事件に関係している。江戸市民から反感を買った田沼政治に対して佐野善左衛門の事件は、事件後に米価が下がったことなどから「世直し大明神」と江戸町民からもてはやされた。町民は佐野善左衛門を直接持ち上げるわけにも行かず、庭にあった桜に託して川柳に詠み込まれたのであろう。保己一も番町に暮らす町民にとって大きな自慢の一つとなっていた。

家は弟の庄右衛門が継いだ。この辺の経緯は保己一の事情とよく似ている。江戸に出て当道座に入門し、師匠は雨谷検校すん一であった。須賀一は宝暦六年(一七五六)に検校に昇進している。保己一は雨富検校の弟子となって鍼術を習った。『塙先生伝』にもあるように、雨富検校は何かと保己一の面倒をよく見てくれた。さらに保己一の才能を見いだして国学の道へと進ませてください、昇進時の資金的援助も惜しまなかった。保己一は師への恩を深く感じ、師の本姓塙を勾当昇進時に採用したのも、師恩に報いようとしたものと思われる。

② 歌学者萩原宗固はぎわらそうこ

保己一が当道座に入り、按摩や鍼などの修行を行ったが芳しくなく、師の雨富検校は保己一に学問の才があることを見抜いて、その道へ進むことを認めてくれた。さらに当時著名な学者を紹介してくれ、その門に入るようになった。その一人に歌学者の萩原宗固がいた。

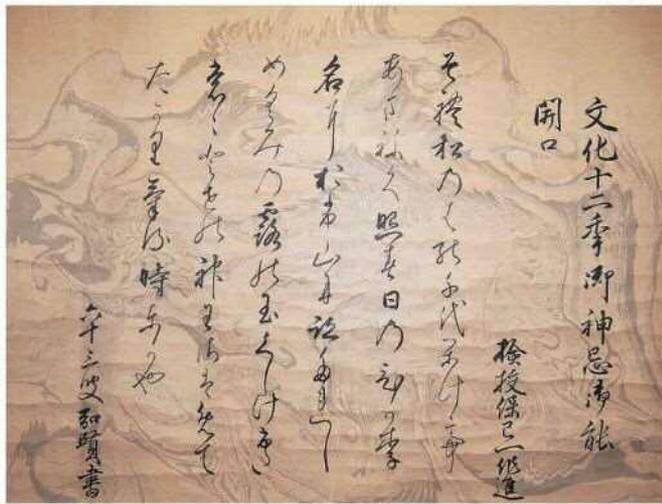
萩原宗固は江戸出身で、鈴木氏よりで後に萩原家の養子となった。名は七左衛門貞辰といった。天明四年(一七八四)没。八十二歳。宗固は保己一が歌の才能よりも文章を読む才能に優れていることを見抜いて、当時著名な国学者の賀茂真淵の門に入るよう勧めた。さらに真淵の性格を考慮して、入門する際の心掛けなどを指南している。保己一は宗固師匠の指示に従い、結果、半年という短期間の入門であったが真淵から可愛がられたという。保己一が国学者として名を現し始めた頃、再び和歌について学ぶように勧め、他流の第一人者の日野資枝への入門を勧めている。宗固は流派を問わず保己一にとって為になる師匠を見つけてそこに入門するよう取り計らっ

てくれたのである。保己一にとって宗固宗匠の許に入門したことは極めて幸運であったといえる。

保己一の門人

① 屋代弘賢

旗本、国学者。宝暦八年（一七五八）に江戸で幕臣の子として生まれる。幼少時から書を学び、成長して天明二年（一七八二）に幕府の書役として登用される。寛政四年（一七九二）には御祐筆所詰支配勘



屋代弘賢書の御神忌御能開口（塙保己一記念館所蔵）

定役となる。さらにその後表祐筆勘定格となった。学者としてその名が知られ、古典の研究に優れた。また蔵書家としても知られ「不忍文庫」と呼ばれ数万冊の書籍を所有した。保己一の事業の中心的人物として活躍し、『群書類従』の編さんや和学講談所の運営で大きな役割を果たした。また書家としても優れ、保己一の代筆を行った。

ち甚四郎と称す。号は柳洲。享和二年（一八〇二）二十六歳のとき江戸に出て、塙保己一の門に入り『群書類従』編さんに参加する。二十三歳のとき旗本中山有林の養子となり、書物御用出役から出役頭取となった。保己一が和学講談所を開くとこれに従い、信名の名前も有名になった。保己一が関西方面の旅をしたときはよく供をしている。著書に『南巡逸史』『南山考』『氏族志料』『守護地頭考』『常陸治乱記』『常陸編年』『新編常陸国誌』などがある。なお『新編常陸国誌』は信名が在世中は未完で、没後に色川三中・栗田寛の修訂・増補を得て完成した。信名は保己一の伝記『温古堂塙先生伝』を著した。

③ 石原正明

初名将聴。号を蓬堂。通称を喜左衛門という。尾張国出身。始め漢学を学ぶが、途中より国学に転じて鈴屋の門に入り、その後、塙保己一の門人となる。博覧卓見にして有職の学に詳しかった。保己一の品川の別荘に五年間住み、版木の管理にも力を尽くしたようである。著書に『冠位通考』等がある。晩年病になり、郷里に戻り、文政四年（一八二二）に尾張名古屋にて没する。歳六十。

④ 奈佐勝臯

幕臣にして国学者。延享二年（一七四五）生まれ、寛政十一年（一七九九）没。本姓は日下部。初名は勝美。通称は久左衛門。号は隅東。塙保己一の門弟で、和学講談所の初代会頭となる。著作に「古語拾遺攷異」・「山吹日記」等がある。

⑤ 横田茂語

通称孫兵衛。号を翻錦亭という。当初は保己一と同様に萩原宗固

② 中山信名

旗本、国学者。天明七年（一七八七）に常陸国久慈郡石名坂村（茨城県日立市）の医者坂本玄卜の子として生まれる。通称平四郎、の

に師事し、保己一と茂語の二人は宗固門の秀才と呼ばれていたらしい。二人は学友であり、保己一は文章に優れ、茂語は和歌に優れていたという。後に茂語は保己一に師事し、『群書類従』の編さんと和学講談所の運営に尽力した。

⑥ 松岡辰方としかた

江戸時代後期の有職故実家。明和元年（一七六四）生まれ、天保十一年（一八四〇）没。通称平次郎。号は梅軒・双松軒。筑後久留米

コラム⑤ 『群書類従』とは

古代より江戸時代後期までに作成された我が国の様々な書物の内、一巻・二巻といった小部の書を収集し、一千部を目標に二五の分類に分けて収録した一大叢書。分類は、神祇・帝王・補任・系譜・伝・官職・律令・公事・装束・文筆・消息・和歌・連歌・物語・日記・紀行・管弦・蹴鞠・鷹・遊戯・飲食・合戦・武家・釈家・雑である。

刊行当時は六七〇巻であったが、まもなく見直しが行われ、六六六巻となった。この中には二二七〇点もの書物が収められている。保己一は安永八年（一七七九）に群書類従刊行の祈願を行い、以後、事業を門人達と推し進め文政二年（一八一九）に約四十年もの歳月を要して完成した。

編集方針として、『平家物語』・『太平記』・『源氏物語』などの著名で大部のものは比較的当時でもよく残されており、それよりも小部で失われやすいもの、貴重なものを中心に収録している。『群書類従』は多くの貴重な文献を含んでおり、日本の歴史や文学を研究する上で極めて重要な基礎的文献となっており、広く活用されている。

藩の松岡家を継ぎ、有馬家に仕え江戸詰となる。国学を塙保己一に学び、武家故実を伊勢貞春に、公家故実を高倉永雅に、公家有職を壺井義知等に学んだ。保己一の『群書類従』の編さんに参加し、屋代弘賢らと共に和学講談所の会頭を務めた。

⑦ 山崎知雄

通称弥左衛門。号は武陵。江戸の人。寛政十年（一七九八）生まれ。岸本由豆流に国学を学び、書を喜多武清に学ぶ。「日本紀略」を読んでその間違いの多さに驚き憤然とその校正を塙保己一に相談し、保己一もその業を行うことを勧め励ましたという。「校正日本紀略」は嘉永三年（一八五〇）に完成し、書肆玉山堂より刊行した。玉山堂の主人もその刊行に協力し尽力したという。保己一に相談したのは保己一晩年のことと思われ、知雄も二十歳前後の若者だった。文久元年（一八六一）没。六十四歳。なお、清宮秀堅『古学小伝』と『徳育資料塙検校詳伝』とは年齢に違いがある。

⑧ 千葉直胤なおたね

江戸時代中後期の国学者。通称は重兵衛。号は文斉存古堂。江戸出身。生没年は不詳。塙保己一の門人であり、保己一の事業を助けた。著作に「宇久比須考」・「海獣考」等がある。直胤は著書に「我が国には今まで大書といえるものは三つあり、一つは滋野貞主の『秘府略』千巻と西山公の『礼儀類典』五百十巻、これらに次ぐのが我が師故塙保己一先生の『群書類従』一書のみにて六百六十五巻。直胤和漢の書をしたふこと人にこたえたれば、この書を見る毎に師のいさをのかたじけなさに感涙袖をうるほさざることなし」と書いていて、師保己一をいかに愛したかが伝わってくる。

コラム⑥ 塙保己一と「三偉人」

埼玉県の三偉人は塙保己一と渋沢栄一・荻野吟子である。渋沢栄一は近代に活躍した大実業家、荻野吟子は日本最初の女医として有名である。時代を異にして活躍した三人は、実は意外なところで結ばれていた。三人とも埼玉県北部の児玉・大里郡の出身であり、保己一の業績は吟子の人生を左右することとなった。渋沢栄一は日本の実業界に大きな影響を与えた人物で、日本の近代化に大きな役割を果たした。栄一は同じ埼玉出身の偉大な国学者塙保己一の顕彰と、保己一達が残した『群書類従』の版木の保存に大きく貢献した。荻野吟子は女医になるために多くの困難を克服しなければならず、当初女医の前例がないと医師試験への受験も拒否されたが、塙保己一が復刻した『令義解』の中に「医疾令」という法律があり、その中に女医の記述があったことから日本史上、女医の先例があったことが証明され受験が許されたという経緯があった。『令義解』は古代の法律をまとめた書籍であり、江戸時代になってその大半が散逸していた。塙保己一が全国各地より古書を集め、『令義解』十巻を復元させたのである。保己一がいなければ、『令義解』の復元は大幅に遅れるか復元できなかったかもしれない、女医の誕生は大幅に遅くなっただかもしれない。

⑨ 鴻池(草間)伊助

江戸時代後期に活躍した大坂の豪商で両替商、かつ経済学者として知られる。名は直方。京都の商人榭屋唯右衛門の子で、宝暦三年

(一七五三)生まれ。宝暦十二年(一七六二)、十歳のとき京都の鴻池家の両替店に奉公した。安永三年(一七七四)には、二十二歳で鴻池の別家のひとつ大坂尼崎町の草間家の婿養子となり、大坂の鴻池本家勤めとなった。鴻池伊助或いは草間伊助を名乗り、鴻池本家の支配人として活躍した。塙保己一との出会いは不明だが、伊助は保己一に多額の融資を行っており、かつ『群書類従』の販売にも協力した。保己一と伊助の親交は続き二十年近くも続いた。伊助は保己一没後も塙家への支援を行っていたらしい。『群書類従』の刊行にあたり財政的な貢献度は極めて高いものである。文化五年(一八〇八)には「自家業」が許され鴻池別家となった。自家業のかたわら著述に努め、文化十二年(一八一五)に『三貨図彙』を脱稿。その刊行に当たっては保己一の指導があったといい、保己一がその序文を書いている。伊助は天保二年(一八三一)に没した。伊助は有力な支援者であり、また門人でもあった。

なお、塙保己一記念館所蔵文書中の「御父様御遺書の内御懇意名前留過去帳」によれば、天保二年二月二十五日に没した「寛誉昌禎居士 草間伊三之助」がおり、弘化二年(一八四五)正月二日没の「湛誉昌然禅定門 草間伊助」とある。

⑩ 保己一と土佐の人々

保己一の弟子の中には馬詰親音・宮地仲枝・中山巖水・武藤平道らの土佐藩士がいた(土佐国は現在の高知県)。歌学者馬詰親音は藩主の許しを得て安永五年(一七七六)九月に歌人萩原宗固に入門した。この時保己一は勾当であったが、親音は天明元年(一七八一)から寛政七年(一七九五)まで江戸におり、保己一訪問は欠かさなかったようである。保己一に入門した年は不明だが、保己一から多くの学問

を学んだ。親音の手記には、水戸藩の「大日本史」の校正を保己一から任されたことを記録していて、他にも和学講談所の講習規則なども記録している。

親音は帰国後も保己一より影響を受けたと思われる各種の事業を行っており、土佐国で最初に保己一流の学問をもたらした人であった。

宮地仲枝は土佐の儒者宮地春樹の子で、親音とは少年時代からの知り合いであった。寛政七年（一七九五）に二度目の江戸出府で五月に保己一と対面している。和学講談所に入所し、年末までに二十回も聴講している。この間、屋代弘賢や石原正明・松岡辰方らと知り合いになっている。翌年四月に江戸をたって帰国している。仲枝は文化元年（一八〇四）に再び江戸に出て、和学講談所を訪ねたが、この時初めて保己一の婿養子の金十郎と面会している。仲枝の晩年は藩主より怒りを買って不遇なものとなったが、書写の業に人並み外れた力量を示したという。大日本史・藩翰譜・土佐国蠶簡集の筆写などを行ったという。

中山巖水（いづみ）は天明八年（一七八八）より寛政十年（一七九八）・文化五年（一八〇八）・同十一年（一八一四）・文政元年（一八一八）と出府し、この間に保己一に入門した。

武藤平道は国学者で歴史家であった。安永七年（一七七八）生まれで、詳細は不明だが寛政八年（一七九六）頃には入門していて『群書類従』を公読（二人以上の人が寄り集まって読書し、その意味を研究すること）していた。

また彼らの他にも北川柳益は宮地仲枝の門人で、出府した際に保己一に入門したといい、文化十二年（一八一五）に保己一が將軍家にお目見えした栄誉を柳益は土佐に帰国後、師の仲枝に報告したという。

以上の土佐藩士達が塙保己一の影響を強く受け、帰国後の土佐の

国学の発展に大きく貢献したが、保己一の影響も土佐に伝えている。後年になって、吉村春峰が『土佐国群書類従』を編纂したが、これはまさに土佐における塙保己一の流派が花開いたともいえる。

（関田駒吉「塙検校と土佐人」・竹内秀雄「群書類従の系譜」——『土佐国群書類従』を中心に——より）

⑪ そのほかの門人たち

保己一の門人にはまだまだ多くの者がいたと思われるが、経歴等明らかに出来るものは少ない。『塙先生伝』に見える稲山行教や、江戸出身の長野美波留なども保己一の門人であった。

保己一の家族や友人たち

① 塙保己一の母



「塙保己一物語」（平成2年）より

塙保己一を産んだ母は、幼い頃体が弱く失明した保己一にとってかけがえない存在であった。母は病弱の保己一を背負い、藤岡宿の桐淵医師へ通ったといい、生家近くの三日月不動堂へも病氣快癒の祈願のため日参したという。また保己一が江戸に出たとき母が帯

の深さが偲ばれる。保己一は十二歳の時にこの大切な母を病気で失ったが、その辛さを乗り越えての江戸出府であった。保己一の母については賀美郡藤木戸村斎藤理左衛門の娘といわれているが、名前については正確には伝えられておらず、一般的には「きよ」と呼ばれている。母の実家は藤木戸村の名主を務めた旧家であり、名主斎藤利兵衛が奇特者として『孝義録』に載っており、『新編武蔵風土記稿』にも「褒善者利兵衛」として載っている。今の名主利兵衛の父と言っているのが、「利兵衛」を襲名している、隠居名が「理左衛門」なのだろう。ただし名主家の娘を保己一の実家荻野家が娶れたかは疑問が残る、荻野家が保木野村の名主或いは組頭や年寄などの役に就いていた家かは不明である。後に保己一が総検校となったこと、息子の次郎忠宝が旗本になったことから、弥七の時に領主の永島家から「郷士」として苗字帯刀を認められている。

② 子息の塙忠宝

保己一の四男で、通称は次郎。文化四年(一八〇七)に江戸表六番町の屋敷で生まれた。長男寅之助。次男道之助は早世し、三男熊太郎は五味忠次郎の養子となっていたため、次郎が保己一の跡を相続した。父保己一が死去した文政四年(一八二一)にはまだ十五歳であったが、跡目相続の準備が出来ていなかったため、父の死を一年伏せて、文政五年に死去したことにして、その間に跡目相続の手続きを済ませている。次郎は健常者であったため当道座における保己一の相続は叶わなかったが、和学講談所相続を願って幕府より認められた。相続に当たっては門弟で幕臣の屋代弘賢や中山信名らの力がものを言ったのであろう。次郎は保己一より国学を学び、父死去の後には保己一の門弟の屋代弘賢らに国学を学んだ。次郎は保己一が

進めていた『続群書類従』の刊行に向けて努力したが、幕末の動乱期にあたり、事業の伸展に苦慮した。次郎は和学講談所の運営及び組織の拡張など、『続群書類従』や『塙史料』の編さん、幕府より依頼された『武家名目抄』の編さんと多忙な業務をこなしている。しかしながら和学講談所の中心的人物の屋代弘賢が離脱したり中山信名の死去などにより事業は大いに停滞することとなった。そんな中、文久二年(一八六二)十二月二十一日の夜、駿河台の中坊陽之助家で開



大田南畝書簡(塙保己一記念館所蔵)

かれた歌会の帰り、自宅近くで長州藩士に襲われ、翌日死去するという不幸な事件が起きた。次郎を襲ったのは伊藤俊輔(博文)と山尾庸三だったという。次郎が襲われた原因は、老中安藤対馬守が攘夷を主張して開国に反対する孝明天皇の廃位をするための前例を次郎に調査させたとの噂が広まったため、江戸市中に潜伏していた尊王攘夷派の長州藩士らを刺激し、ついに襲われたのであった。次郎はいわゆる「廢帝論」を調べたわけではなく、幕府より寛永以前の外国人への対応事例の調査を行ったのである。冤罪により殺されたのであった。塙家は子息忠韶が跡を継いだ。

③ 大田南畝(蜀山人)

幕臣、文人。寛延二年(一七四九)に江戸牛込にて生まれる。早くから漢詩文に親しみ、松崎観海より学び、十九歳の時に狂詩集を刊行して狂歌の達人として注目を浴びた。幕

臣として勘定所に勤め職務を果たすかたわら文人として積極的に活動した。漢詩文・狂歌・狂誌・洒落本・随筆など多くの作品を残した。名は覃で、通称直次郎、七左衛門、号は南畝、蜀山人、四方赤良等多くがあった。

南畝は保己一より三歳若い極めて親しい友人関係にあり、『群書類従』販売の宣伝を行った。『群書類従』販売の宣伝を行った。

塙保己一記念館には大田南畝よりの書状一点が残されており、長崎に出張中の南畝からのもので、文中に『群書類従』販売のための見本を送るよう書き記している。

④『塙勾当伝』作者の萩野信敏

『塙勾当伝』は塙保己一が勾当の位に昇ってから四年後に萩野信敏が書いた伝記である。漢文調の難解な文章で、まだ全訳もなされておらず、全文を見るのは困難なもので、内容の一部が土屋侯保氏「塙検校と萩野信敏」で紹介されている。保己一の伝記類のほとんどは、この塙勾当伝と中山信名の『塙先生伝』を元に書かれている。

著者の萩野信敏は出雲松江藩の藩士で、三百石取の江戸詰めであった。名を伊三郎といい、号は鳩谷、また天愚といった。松江藩の六代藩主松平宗行は天隆公等と呼ばれた文人で、後を継いだ七代藩主の治郷も不昧公と呼ばれた茶の湯で知られた文人であった。この二代に仕えた信敏も祖父・父ともに優れた人物で学者としても藩内で知られていた。なお苗字は孔平くひらともいい、よく孔平信敏と署名している。信敏は大変長命な人で、享保二年（一七二七）生まれ、没年ははっきりしないが、文化十四年（一八一七）ともいわれ、百一歳まで生きたことになる。

保己一と信敏がどういふ事情で出会ったのかは不明だが、保己一

は四谷に住み、平河天神に日参していたこと、信敏はその平河天神のすぐ前で生まれ、松江藩の江戸藩邸はその平河町のすぐそばにあったことなど、地理的にも出会いやすい環境にあったようである。二人の関係は師匠と弟子という関係より友人に近い関係であったようである。信敏と大田南畝の場合も同様であった。信敏の方が保己一より遙かに年上であり、保己一が勾当に昇った時の安永四年（一七七五）には保己一は三十歳で、信敏は五十八歳であった。信敏は保己一の力量を極めて高く評価したからこそ、年下の保己一ともよい関係を築いたのであろう。信敏は南畝らとともに保己一の昇進への手助けをした友人の一人だったと思われる。保己一は松江藩とも深いつきあいがあり、保己一は藩主松平治郷（不昧）の子の斉恒の侍講になつていて、さらに松平治郷の筆塚建立に当たつてその撰文を保己一が行つていた。そんな関係から保己一は度々赤坂藩邸を訪れていた。保己一と松平家の仲を取り持ったのはやはり信敏だったのであろう。（土屋侯保「塙検校と萩野信敏」による。）

⑤和学講談所設立を薦めた浄聖院亮衍

保己一の弟子の中山信名が、『塙先生伝』の中で、上野国の修験者常照院が保己一に和学講談所の設立を勧めたことを記している。この常照院とは上野国群馬郡下田野村（現吉岡町）の華藏寺第八世の浄聖院亮衍のことである。亮衍は元文三年（一七三三）生まれ、少年の頃より和漢の学に優れていたという。保己一の師匠たる山岡浚明の影響を受けてるともいい、保己一との関係の深い国学者奈佐勝阜との親交も深かったという。亮衍は国学者でもあり保己一の『群書類従』の編さんにも関与している。寛政四年（一七九二）当時、二百巻が開板されていたという。この時、『群書類従』の編さんには

二十人程が携わっており、亮衍も主要メンバーの一人だったのである。亮衍は保己一より七歳年長であったが、『塙先生伝』に「常に大人のかたに來とぶらいける」とあるように、類繁に保己一の元に入入りしているのは、まさに『群書類従』編さんの主要メンバーであったからである。亮衍が保己一に和学講談所設立への助言をしたこと以外に、この後名前が出てこないのは、亮衍が寛政五年（一七九三）十月に京都において修験道の学舎建立の命を聖護院より受けたためである。亮衍は以後、学舎建立に奔走し、『群書類従』編さんから手を引くこととなった。なお、亮衍の修験道学舎建立が、保己一の和学講談所建設への伏線となっていた。（岡中正行「和学講談所の設立をめぐって」―常照院と浄聖院亮衍と―、小沢賢二「塙検校と浄聖院亮衍」による。）

コラム⑦ 塙保己一と水戸藩

水戸藩は幕府御三家の一つで、江戸にも近く、水戸光圀の起こした『大日本史』を編さんするなど文化面でも知られた藩である。保己一が群書類従の編さんを行う上でもつながりを持ちたい藩の筆頭ではなかったが、水戸藩には彰考館（史館）があり、学者が集って業務を行っていた。その総裁立原翠軒との出会いは保己一にとっても幸運であったに違いない。立原から保己一の能力を買われて彰考館に入りが許されることは、彰考館で持っている多数の古書を見られるからである。保己一は藩主水戸治保・保己の二代に拝謁し、手当を給されて水戸藩の修史事業の手助けを行った。保己一の水戸藩での実績は幕府からも評価されたし、後に尾張・紀伊藩への出入りにもプラスとなったと思われる。

保己一の上司など

① 水戸藩彰考館総裁の立原翠軒

たちばらすいけん

水戸藩士。延享元年（一七四四）に水戸城下に生まれる。名は甚五郎、諱は万。字は伯時で号は東里。致仕（官職を辞すること）後に翠軒と号する。父は水戸藩彰考館文庫管理役の立原蘭溪。幼時に谷田部東壑に師事し、宝暦十年（一七六〇）に荻生徂徠学派の田中江南に弟子入りする。同十三年（一七六三）、江戸彰考館の書写場備となり、江戸で大内熊耳、細井平洲、松平楽山らに諸学を学ぶ。明和三年（一七六六）には水戸彰考館の編集員となった。天明六年（一七八六）には彰考館総裁となり、以後に享和三年（一八〇三）に致仕するまで『大日本史』の編さんに力を注いだ。この編さんにあたって塙保己一の力量を認めた翠軒は、藩内に大きな反対があったにもかかわらず保己一を水戸藩に招いて編さんにあたらせた。『大日本史』編さんは永く停滞していたが、この修史事業を軌道に乗せたことは、翠軒の大きな功績であった。『大日本史』編さん上の問題で門人藤田幽谷と対立し、藩主徳川治保の信任を失って享和三年（一八〇三）に致仕を命ぜられ、総裁も辞任した。なお翠軒は文人としてもその名を知られている。文政六年（一八二三）に没した。

② 寛政の改革と老中松平定信

まつだいらさだのぶ

松平定信は徳川家御三卿の一つ田安家に生まれる。幼少期から聡明さが知られ、将来は田安家当主、十一代將軍の候補とまで考えられた。しかしながら田沼意次の政策に異を唱え、対立したことから奥州白河藩松平定邦の養子にされた。定信は白河藩の財政立て直しに手腕を発揮し、特に天明の飢饉での被害を最低限に抑えることに成功して名声を得た。田沼意次の失脚後、御三家の推挙を受け年少

の十一代將軍家齊を補佐し、老中首座に就いた。定信は幕政の改革を目指したが、祖父の八代將軍吉宗の享保の改革を手本とした。対立した田沼政治を否定して、飢饉対策・賄賂人事廃止・儉約奨励・旗本への文武奨励などを行った。朱子学を正当として「寛政異学の禁」で蘭学を取り締まった。国学を目指した塙保己一に對しては、和学講談所の設立を認可し、幕臣の教育面などに期待した。また社会問題化していた当道座の高利貸し問題でも、保己一を取締役に任命して当道座の改革を行わせた。

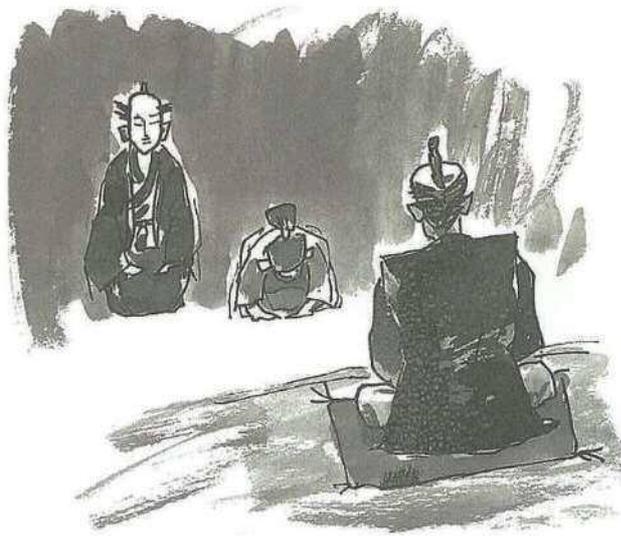
③保己一出身地保木野村の領主永島恭林ながしまゆきとし

辰之助(保己一)は江戸に出て検校雨富須賀一の門に入ったが、これの経緯についての史料は残されておらず、どのようにして雨富門に入れたのかは不明となっている。通常、北武蔵の小村の農民の子が江戸の検校との伝手ついでを持っていくはずもなく、保木野村でも盲目の少年をむやみに江戸に送り出すはずもない。伝記では辰之助を江戸に連れて行ったのは絹商人とし、さらに話が膨らんで、その絹商人が後の江戸町奉行となった根岸肥前守鎮衛であったとする。これについては勿論実話ではないが、同じ兒玉郡内の傍示堂村名主内野伝左衛門が連れて行ったとも言われている。これが事実ならば、名主に連れられた先も既に決められていたと考えられよう。辰之助の生まれた兒玉郡保木野村の領主は旗本の永島氏で、永島氏は同じ兒玉郡内の傍示堂村の領主でもあった。だから保木野村名主よりの依頼で傍示堂村名主が辰之助を江戸まで連れて行ったことは考えられよう。しかしながら一農民の子を名主が面倒を見ると言うことはそれなりの理由が必要である。残念ながらそれを説明する史料は存在しないため不明であるが、両村を結びつける大きな関係は領主が同

じということ、旗本の永島氏より指示があったと考えるべきだろう。おそらくは永島氏の指示で、辰之助を江戸に呼び、雨富検校に入門させたものと思われる。入門先に雨富検校を選んだ理由も不明であるが、永島氏と雨富検校は何らかの関係があったのではないだろうか。結果的に辰之助にとっては幸運にも最良の入門先となったのである。

この時の永島家の当主は恭林で、永島氏は武蔵国の榛沢郡と兒玉郡内に五百石の所領を持つ旗本であった。恭林は養子として検校豊浪如意一の息子を跡継ぎとしていくことから、盲人に對して極めて理解のある人物だったと思われる。

なお、辰之助が江戸に出て雨富検校の家に行く前に、別の者の家に行ったん足を止めたが、伝記類によってはかなり異なっており、この辺の記述は創作があるのであろう。『塙先生伝』には記述がな



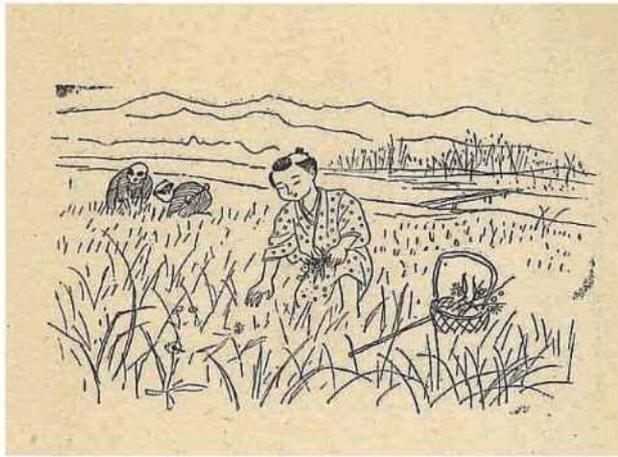
「塙保己一物語」(平成2年)より

く、温故学会所蔵の作成年不詳の『温古先生伝』では、高井大隅守の家に数年居たとし、阪本百次郎『塙保己一先生』・下中彌三郎『塙保己一言行録』・長沼依山『塙保己一伝』では、大御番東条源右衛門の家とする。ただこの辺の事情は保己一が十五歳で雨富検校に入門したこ

とと、十三歳で江戸へ出たとする事で生じる二年間の空白を説明するために創作された可能性がある。保己一が幼少の時病弱であったことから、歳を二つ減じて辰の歳生まれとし、名前も寅之助から辰之助に変えたことである。だから実際には空白の二年間はないのだから、『塙先生伝』では江戸へ出て雨富検校の家に入ったことしか書いていないのである。

五. 保己一に関する逸話^{いつわ}

盲目の国学者塙保己一に関する逸話は多く残されている。大きな業績を残した人物について、その人物の来歴を正しく伝える資料が乏しく、かつ成人してからはともかく幼少の頃の記録は皆無と



長沼依山『塙保己一伝』(昭和31年)より

言ってよいくらい残されていない。そのため多くの逸話が生まれることになる。塙保己一の場合も幼少の頃の記録は皆無であり、本人が語った話や、保己一の親族や保己一をよく知る人が語り伝えたものが、逸話の基本となっているものと思われる。中には偉人を美化するために逸話が一人歩きして話が大きくなったものもあると思われる。保己一に関する逸話には、保己一が

存生中に書かれた『塙勾当伝』や『塙先生伝』に書かれたものもあるから、創作された逸話だけではなく、史実を伝える逸話も含まれているものと思われる。

少年時代の逸話

寅之助(保己一)は七歳の時に病気のため失明したが、両親はある人の勧めもあって、失明に至った不幸を転じようとして、生まれた年を二つ減らした辰の歳生まれとし、名前も辰之助に代えたという。寅之助は花の咲く草木を好み、失明前には野の董を屋敷前に植えたり、その後も色々な草木を植えて楽しんだという。

寅之助は幼少時代より利発で、目が見えなくなつてからも、友達との付き合いには特に気を遣い、いじめに遭わないように特に努力したという。



三日月不動(保木野 龍清寺)

①三日月不動

保己一は子供の頃、母のきよと一緒に地元(保木野)にあるお寺(龍清寺)の三日月不動(不動堂)に毎日のようにお参りしたという。龍清寺は保己一家の北側にあるお寺で歩いて数分の近い位置にあり、本堂の前に三日月不動がある。この三日月不動は、三日月はやがて満ちるので、足りないものを補ってくれると信じられ、この地の人たちに信仰さ

れていた。保己一の両親もこの病気が治るように祈願したのである。
※保己一の子供時代の記録は何も残されていないが、保己一の生家と龍清寺は極めて近くにあり、寺は遊び場でもあるが、少年寅之助の学びの場でもあったかもしれない。利発な寅之助は龍清寺住職から多くのことを学んだのだろう。

②江戸へ出るきっかけ

保己一は十五歳で江戸へ出る決心をした。そのきっかけの一つは母の死であった。母は病気の寅之助を背負って藤岡の医者にみせたり、毎日三日月不動に参ったりと、寅之助に大きな愛情を掛け、寅之助十二歳の時に母のきよは病気でこの世を去った。最愛の母を失った寅之助の悲しみはいくばくであったか。寅之助は母の死の悲しみから立ち直るためにも、江戸へ出る大きな決心をした。

辰之助は、当時江戸では太平記読みを職業とする者がおり、太平記を人に語るることによって生計を立てているという噂話を聞いた。これを聞いた辰之助は「太平記はわずか四十巻に過ぎず、これを語ることで妻子を養えるのであれば、自分にもできない事はない」と言ったという。

※この逸話は、既に少年辰之助が相当な記憶力があつた事を意味しており、さらに軍記物語の太平記を知っていたことになる。十代になった辰之助はそれなりの学問を既に身に付けていたことになる。

③辰之助を江戸へ連れて行った人(一)

辰之助は十五歳で江戸へ出たが、保木野村から本庄宿へ出て江戸に向かったものと思われる。保木野村からは脇往還川越道を通って江戸に向かう方法もあるが、保己一を連れて行ってくれた人が本庄

宿北隣の村傍示堂村の名主内野伝左衛門という。保己一の伝記の中には辰之助を連れていったのは絹商人であり、江戸に向かう途中に出世比べをしようとしたという話が伝わっているが、この絹商人が後に江戸町奉行に出世した根岸肥前守鎮衛だったという説も残されている。中山信名『塙先生伝』には絹商人に連れられて江戸に出たとあり、注記にこの絹商人は与力の株を買って町奉行までなった根岸肥前守で出世比べの約束をしたとある。ただしこの注記は明治になつて保己一の孫塙忠詔が編集した際に混入した可能性がある。中山信名『塙先生伝』でさえ、『群書類従』譜録に収められたものと、渡辺知三郎編『空前絶後、盲人之王塙検校伝』に収められたものでは若干の違いが見られるので、注記は創作されたものである。明治



長沼依山『塙保己一伝』(昭和31年)より

三十五年(一九〇二)発行の杉本文太郎著『塙保己一』では、同じ保木野村の生糸商人の子が辰之助を連れていき、後に江戸町奉行の根岸肥前守になったとしている。概ね明治期以降に刊行された保己一の伝記や物語は、中山信名『塙先生伝』に注記されたこの逸話が元となり、絹商人と出世話したことが語られている。

※江戸町奉行の根岸肥前守鎮衛は実在の武士で、大岡越前守忠相や遠山金四郎景元と比べると知名度は低いようだが、名奉行の一人として知られている。鎮衛は下級官吏の安生家

出身で、御家人株を購入して根岸家の養子となった。株の購入には多額の費用がかかることから商人あるいは豪農の出身ではないかとの説もあるが明らかではない。まして保木野村出身とか保己一の出世話にかかわる記録は存在しない。

④辰之助を江戸へ連れて行った人(2)



塙保己一生家（保木野地内）

辰之助は絹商人に連れられて江戸に出たことになっているが、ある新聞記事で、傍示堂村名主内野伝左衛門昌豊が辰之助を連れて出たと報じられた。傍示堂村は保木野村と同じ児玉郡に属し、本庄宿の北東に隣接する村で、保木野村と同じ旗本の永嶋氏の知行村である。傍示堂村周辺地域は養蚕の盛んな地域であり、絹の取引で江戸へ出る機会も多かったと思われるのである。

名主内野家の者を絹商人と間違えた可能性もある。
※辰之助が江戸に出る場合、辰之助と江戸での身元引受人との繋がりが生じるが、生家萩野家と江戸との繋がりを示すものは何も無いから、領主の永嶋氏の配慮と考えられ、辰之助の利発さが当時神童とみられ保木野村の名主より江戸の永嶋氏へと伝えられた可能性が考えられよう。

⑤保己一の生家の話

保己一は保木野村の農民の出である。有名人の出世話は貧しい家に

生まれ苦労しながら出世していくストーリーが綴られるが、保己一の場合はどうだったのであろうか。保己一の生家は農家であるが萩野姓を持ち、武蔵七党横山党萩野氏の後裔という。保己一が江戸に出るとき母の作った巾着に二十三文を入れてあった話や、保己一が生涯美食や華美を好まず質素儉約であったことから、貧しい家に生まれ育ったイメージが想像されるが、生家は保木野村の有力農民であったと思われる。残念ながら保木野村における土地関係資料などの基本史料が失われているため、生家の農民としての位置づけは不明である。文久二年（一八六二）に保己一の子息次郎が、父の弟卯右衛門の養子となった弥七に宛てた金五十両の借用証文が残されていることから、萩野弥七にはそれなりの経済力があつた事が知られよう。

江戸へ出てからの逸話

①版木屋前川との逸話

保己一が衆分のときの話で、平河天満宮に毎日参詣していたが、ある雨の日、参詣途中で下駄の鼻緒が切れて困ってしまった。保己一は近くの天満宮境内で版木屋を開いていた前川という版木師を頼り、鼻緒になるものを所望したが、前川は保己一の口ぶりが生意気に聞こえたので、按摩のくせにという気持ちで馬鹿にして銭の穴を通す差し縄を投げてよこした。保己一は恥ずかしい思いでその場を立ち去ったという。後に保己一が『群書類従』の版木を作る際に、この前川という



「塙保己一物語」(平成2年)より

版木屋を指名して、仕事を任せたといい。保己一は前川にその時のことを話して聞かせ、今の自分があるのは、あの時のことを思いだして頑張ってきたからだと話したという。

②立原翠軒と藤田幽谷

保己一は水戸藩に出入りを許され『大日本史』の編さんに携わった。保己一を登用したのは水戸藩の彰考館(史館)総裁の立原翠軒であった。翠軒は水戸光圀が起こした『大日本史』編さん事業が停滞していたのを立て直した。立原翠軒と保己一の出会いは、保己一が門弟の屋代弘賢の家を訪れた時のことという。このときにある方が所蔵している御願文に関して議論が始まり、奥書に太上天皇某の記載があるが、御諱がなく願文の年紀から後伏見院と花園院のいずれかまではわかったが、どちらの作品なのか決め手がなく議論は行き詰ってしまった。この議論を黙って聞いていた保己一は、目の見えない私はその願文が誰のかはわからないが、もう一度読み聞かせてほしいと言った。弟子の弘賢が読みあげると、保己一は膝を叩いて分かったと言ひ、花園院の作品と言った。保己一は二人にその理由を説明し、二人は保己一の力量に驚いたという。翠軒はこの事があってから保己一の学力を尊敬し、水戸藩の『大日本史』編さんに参与させることとなった。

立原翠軒の弟子の藤田幽谷は後に彰考館の総裁となったが、『大日本史』の編さん方針をめぐって次第に二人は対立する仲となった。立原翠軒が保己一を水戸藩に推挙した経緯を考えると幽谷が保己一に対して好意を持っていたとは思われない。保己一の研究態度が極めて厳格で、『大日本史』の編さんにあたって水戸藩の学者に対して、「今後は各条の註記は出典に関しては悉く原典にあたって出入りを

明らかにするように」と命じた。この時多くの史館の学者は面倒がつて反発した。幽谷も「塙の議、髪を数えて櫛けづり、米を数えて炊ぐの類のみ」と保己一の態度は細かすぎると皮肉ったが、作業が進むうちに、細かく原典に当たると、「遂によく其の緒をたずね、後人の臆を以て意を潤り、原書に悖れるもの、皆以て訂正を加ふるを得たり、塙の功また没すべからず」と評価が一変している。さらに幽谷は先に自分が皮肉で言った「櫛の齒や米の数を数える」態度は史家にとって最も大切な態度だとまで言っている。おそらくは当初は立原翠軒の推挙した者として煙たがっていたが、実際にその仕事ぶりから学者としての優秀さを身を以て感じ、自らの態度を改めたものと思われる。

③検校面の話

保己一は江戸で成功を収めたが、国元では弟の卯右衛門が跡を取っていた。卯右衛門は若くしてこの世を去ったが、極めて放蕩鬼であった。酒浸りで家業に励まず、先祖伝来の田地を売り払い身を持ち崩してしまった。保己一は実家の様子を人づてに聞き、蓄え置



検校面の碑 (保木野地内)

いた金子で田三反歩を買い戻して与えたが、それでも卯右衛門はそれをまた売り払ってしまったという。保己一はそれでも怒らずに、我が家を思う心が厚かったので三度まで買い戻したという。その内に卯右衛門は若死にしたので、その田は荻野家に残り、検校面として伝えられたという。生家より南東

側に一〇〇メートルほど行った田んぼの端に、昭和六年（一九三二）に建てられた保己一の一一〇回忌記念の検校面の碑がある。

④保己一自殺を思いとどまる

保己一は江戸に出て雨富検校に弟子入りし、当道座の修業を開始した。修業は音曲・鍼・按摩の技を習得しなければならなかった。しかしながら保己一は生まれつき不器用であった。そのため修業を積むものの何一つ満足に芸が身に付かなかったという。当然ながら師の雨富より叱責を受け、同僚からは後れを取ってしまう。雨富家にお世話になっていることから引け目を感じてしまう、さらに自分の

コラム⑧ 塙保己一とヘレン・ケラー

ヘレン・ケラーは三重苦を乗り越えて活躍した教育者・社会福祉活動家である。昭和十二年（一九三七）に平和親善大使として来日して、東京の温故学会やさいたま市の埼玉会館を訪れている。温故学会を訪問した際に、塙保己一座像や愛用の机を触って、「私は子供の頃、母から塙先生をお手本にしなさいと励まされて育ちました。」と語ったという。アメリカ人のヘレンがどうして保己一を知っていたかは明らかではないが、家庭教師サリバン先生をヘレンに紹介したのは電話の発明で知られるアレクサンダー・グラハム・ベルであった。ベルは聾啞教育の研究者で、同じく日本の研究者で文部省の役人であった伊沢修二が訪米の際にベルに話したことで伝わったのではないかと推定される。伊沢修二は国定教科書の認定に関わり、当時の教科書には塙保己一が収録されていて、修二は保己一のことをよく知っていたのである。

将来を考えると希望はなかった。保己一にとってはつらい毎日であった。ある日、保己一は日頃の苦しみから逃れようと自殺を決意し、九段坂の牛ヶ淵のほとりに立ったが、この時にふとある思いが浮かび上がった。大望を抱いて故郷を旅立ちこの地に着いたが、むざむざと身を滅ぼしてもよいものか、それこそ人の笑い種にしかないのではないのか、故郷の父は嘆き苦しむのではないか、保己一は今死ぬ時ではない、このままでは何にもならない、まだ自分が世の中で役に立つことがあるかも知れないと思い、「成らぬのはせぬからだ」と考え、さらに身を引き締めそのまま引き返したことがあったという。その後、雨富検校の特別な計らいで学問の道に進むことができるようになり、保己一は一心に努力していくことになる。

⑤初めて所有した書物

保己一は不器用のため当道座の修業に苦労したが、学問の世界では本人のたゆまない努力の結果、次第に上達してゆき、出入りする邸宅でも学問好きの盲人と知られるようになり、可愛がられるようになったという。番町にいた当時作事奉行であった篠山撰津守の奥方は、保己一が「かん」が悪くて修業が上達しないのを憐れんで、何かと心配をしてくれたという。ある時、保己一に向かって「お前はかんが悪いので食事の様子が見苦しい（握り箸で椀の向こう側から箸で口に掻き込んだ様子）、他所の家での食事は控えるようにしなさい」と言い、「これを食べなさい」と言って煮豆やお菓子を紙に包んでくれたという。また番町には高井山城守の屋敷があり、保己一はここにもよく出入りしたという。山城守の側室にも保己一は気に入られられたようで、ちよくちよく保己一を呼んで下手ではあったが按摩をさせられた。保己一は鏡治代として本を読んでもらうので

あった。ある夏の夜、側室は部屋に吊るした蚊帳の中で本を読み、保己一は外で正座してじつと聞き入っていた。こういう時、保己一は何時か屋敷の女性に頼んでひもで両手を縛ってもらっていた。側室は不思議がり保己一に尋ねると、保己一は蚊に刺されるので、それを手で追い払ってはいは、集中して話を聞けないし、聞き洩らしてしまうからと答えた。側室はあるとき古本の『栄華物語』を買いて保己一に与えたという。保己一はこの時初めて自分の本を持ったので嬉しくてたまらなかった。保己一は終生この事を忘れず、この古本は家の宝として秘蔵したという。

⑥若き日の出来事

保己一がまだ兩富家において、針灸・按摩等の修業に苦勞していた頃の話で、保己一は通りすがりで貧しい家のおかみさんが病気で苦しんでいるとの話を聞いた。保己一は気の毒に思い、医者にも見られないのなら下手だが自分が鍼を打ってやろうと思ひ、按摩と鍼術を行ったという。幸いにこのおかみさんは無事に病気が治ったという。おかみさんは大変喜んで、後日謝礼にいくらかのお金を持参した。しかし保己一は困った顔をして「そのようなお礼を貰おうとしてやったではありません。」と断った。おかみさんはこの言葉を聞いて泣いて感謝したという。後に保己一が弟子に向かって「皆が知るように私の腕は人には及ばない。ただ人のために何かをしたかった。あの人の心を慰めてやりたかったのだ。若し私の腕を知っていたなら利か^きなかつたかもしれないが、兎も角治ったのでなによりだ。あの時お礼を受け取つたらそれは仁術とは言えない」と語つたという。この逸話について『塙勾当伝』では「隣の家の貧婦が病氣になり治療してほしいと頼まれ、保己一は断つたが、それでも是非

にと頼まれた。やむを得ず鍼を打ちお腹をさすつてやった。翌日、貧婦の病氣は治り、謝礼にとお礼を持参したが、保己一はこれを受けずに、自分はまだ鍼を習得していない。幸いにして病氣は治つたが、逆に悪くなつたかもしれない。そのような事がわかれば恨まれても仕方がない。そのような状況でお礼をもらうのはもつての外だといひ、以来鍼を行わなくなつた」といふ。

⑦保己一、講義所を開く

保己一は安永八年(一七七九)に三十四歳の時に講義所を開いて門人に講義を始めた。この時は土手四番町の東条信濃守宅に住んでいた。保己一が『群書類従』の編さんを開始した年でもあり、保己一が国学者として本格的に活動を始めた年でもあった。この頃には保己一の名声が江戸各地に広まり、保己一を慕つて学びに来るものが絶えなかつた。この頃の逸話として次の様な話が伝えられている。

保己一は源氏物語の講義を行つていた。夕方になり室内が暗くなつたので弟子達は灯りをともした。そんな時、一陣の風が吹きわたりその灯火を吹き消した。門弟たちは慌てて、「先生、明かりが消えてしまつたのでしばらく講義を中断してください」と請うた。すると保己一は笑ひながら「さてさて目が見える人は何と不自由な事か」と言つたという。

⑧頼山陽と保己一

江戸時代後期の文学者と名高い頼山陽は『日本外史』を刊行してベストセラーとなつたが、頼山陽は『日本外史』の刊行にあつて塙保己一に引用書籍について問い合わせたという。保己一は山陽の依頼に応え、懇ろにそれについて教授したという。山陽は保己一の教え

のままにそれを『日本外史』に掲げたという。この事は当時保己一の学識・名声が相当に広まっていたことを意味し、山陽も保己一に目を置いていたことになる。保己一の名声は江戸周辺に限らず、京や大坂でも広まっていた。保己一は何度か京・大坂方面へ旅をしているが、宿泊先には当道座関係者に限らず、武士・貴族・商人など様々な人が訪れており、知名度が高かったことがわかる。

⑨保己一、筋を通す

保己一が二十五歳で衆分であった頃の話で、同じ衆分の者に豊一という盲人がいた。豊一は働き者で小銭を貯めて財産を築いたが、病気のため急死した。豊一は子供もなくその遺産を継ぐ人もいなかったため、ある人が保己一の師匠の雨富検校に保己一が遺産を継いだらどうかと勧めた。雨富検校も保己一がこれから昇進するのは費用がかかるからこの話は良い話だと保己一に相続を勧めたという。しかしながら、保己一は生前私と豊一は仲が良かったわけでもなく、考え方も違うので、このようなお話を受けるわけにはいかなから断ってほしいと師匠に話した。雨富検校は保己一の話の笑いながら聞き自分もそう思うので断っておくと言ったという。

⑩保己一の記憶力

保己一は和歌を愛し、自らも和歌集を刊行している。若い頃、歌学者萩原宗固門で横田茂語とともに学んだが、宗固は、和歌は茂語が優れ、学問は保己一が優れると評したという。保己一は和歌の世界では必ずしも超一流とは成り得なかったが、群書類従に収録された古書にもあるように、和歌関連の収集本は極めて多く、知識は豊富であり和歌の宗匠としても優れていたのである。その

ためよく和歌の会に先生として呼ばれることが多かった。保己一が七十歳にもなろうとした頃の話であるが、二浦志摩守主催の和歌の会に判者として呼ばれ、そこで出席者の詠んだ五十句の和歌を暗記して、自宅でその五十句の評点を付けようとしたとき、保己一はどうしても三句を思いだせなかったという。目の見えない保己一は紙に句を書き残すことはできず、全て記憶してきたが、高齢のためか、三句のみ記憶できないものがあつた。保己一は「このように記憶が悪くなつては、今年中には死んでしまふだろう」と家の者に話したという。この逸話は保己一の記憶力の凄さの一端を物語るものである。

⑪保己一の気概

保己一は国学者として大成したが、その身は当道座の一員である。努力の結果昇進して検校となり、晩年には総検校への道も見えてきた。保己一はこの道に入りここまで来たからには、総検校になつてみたいと言つたそうである。実際に最高位の総検校まで登り詰めた。また常々保己一は当道座の社会的地位の向上も考えており、障害者である盲人達の社会での地位向上のために意を砕いていた。当道座では総検校になると將軍家にお目見えが許されるのが通例であつた。「お目見え」とは旗本以上の幕臣が許される格式であり、総検校も旗本・大名並の格式を得たことになる。しかしながら総検校は盲人社会でただ一人であり、当道座全体の地位向上を



江戸城への召状（塙保己一記念館所蔵）

意味するものではなかった。保己一は総検校になる以前にお目見えが許されれば、盲人全体の社会的地位の向上につながるかと考え、それまでに行ってきた『群書類従』の編さんをはじめとする各種の幕府依頼の事業の達成や、和学講談所の運営の実績を掲げて、幕府にお目見への申請を行った。幕府は保己一の申し出を受けてお目見を許可し、二度までもお目見えを実現させてその目的を果たしたのである。

⑫保己一の知恵、機知に富む



大野武男「少年塙保己一伝」昭和4年

ある時、保己一は江戸のある富豪の家に招かれその座敷にて主人と話をしていると、誰かが廊下を通る音がした。保己一はその音を聞き主人に「今通った者はどこか足が悪いのか」と尋ねた。主人は「今通った者は別にどこも悪くはありません」と答えた。保己一は納得せずに「どうも足音がおかしい、きっと何か理由があるはずだ」と主人を問い詰めた。主人はしかたがないので、その者を調べてみると、その者は片方の袖に西瓜を入れている。

この話は保己一の耳の良さ、観察力の鋭さを示しているが、それだけではなくその店の店員の小さなことではあるが不正や過ちまでも気がついて指摘したのではないだろうか。

またある時、塙家に道を訪ねに来た者があった。塙家は来客があり賑わっていたが、その者は町名を書いた紙を見せて「さんずいに吉」という字の付いた町に行きたいのだが誰に聞いてもわからないといい、大変困っている様子であった。塙家に居た者達も「さんずいに吉」という字は知らないもので、誰も答えられなかった。これを聞いた保己一は、手を打って笑いながら、これは「油町」の事だろうと聞いた。不思議に思った人たちは理由を保己一に問うと、保己一は「この字を書いた人は町名は知っていたが文字を知らなかったのだろう、傍にいた人が「さんずいに吉」と言ったので、由を吉と誤って書いてしまったのだろう。」と答えた。道を訪ねた人は、その後無事に油町に行けたといい、後に塙家に寄ってお礼を言ったという。



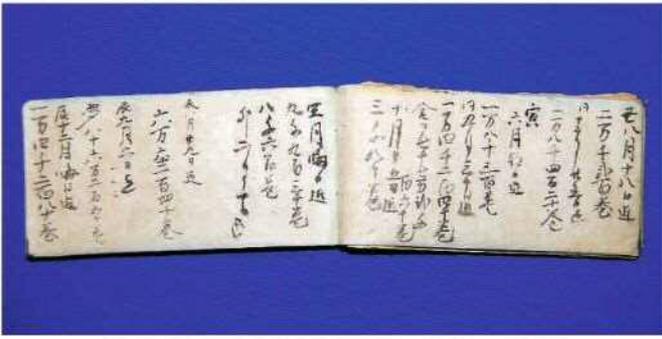
大野武男「少年塙保己一伝」昭和4年

このように保己一は英知に富み、機知にも富んでいた。

⑬保己一の決意、意思の強さ

保己一は子供の頃より病弱で神経質で怒りっぽい性格であったという。しかしながら保己一は凡そ業を成さんとする者は忿怒の心があつては為すことが出来ないと悟り、以来、保己一は何があっても怒らないと誓った。あるとき麴町を歩いていると子供達が保己一を見て笑いながら馬鹿にした。ある子供は道を塞ぐ邪魔をした。しか

しながら保己一は一度も怒らず笑いながら子供たちに接すると、子供達もどうすることも出来ず道を開けたという。保己一は自らの怒りを抑えるために非常なる決心をし、さらに努力を以て修養に励んだという。あるとき保己一の門人の中で酒に溺れてしまう者がいたが、保己一は敢てその者の非を咎めず、非は全て自分にあるとして二度とその様な事のないように努めたという。保己一の肖像画に見られる温厚な表情は、怒らないという本人の心意の決意と努力の結果もたらされたもので、ある時、心学の脇坂義堂という学者が保己一の容貌を見て、「この人の容貌は常人に優れたり、恐らくは大いに名を残す人だろう。特に貴人に愛せられる相をしている」と言ったという。



般若心経巻数帳（塙保己一記念館所蔵）

保己一の意思の強さを示すものに次の様なことがある。保己一は安永八年（一七七九）に『群書類従』の編さんを決意するが、その大業の成就を祈願して般若心経を百万遍誦することを誓った。恐らくは本人もこの一大事業が簡単に成就出来るものではなく、数十年にもわたる大事業になると覚悟しての事だったと思われる。一日百遍を読むことを目標と定め、実際にそれを実行したのである。保己一の遺品・関係資料の中に「般若心経御巻数帳」という小冊子が残されており、安永八年（一七七九）から文政四年（一八二二）までの四十三年間に百九十八万遍余りの記載が残されている。保己一

が亡くなる直前まで、一日も欠かさず詠んでいるのである。まさにこの事一つとってもその意思の強さは驚異的である。

⑭ 公正寛大な保己一への評価

保己一が国学を賀茂真淵に学ぶとき、それを勧めてくれたのは師匠の萩原宗固であった。宗固は自分の弟子であることは伏せて真淵に入門することを勧めたといい、自分の弟子を他の師匠に推薦することを嫌う人が多い中で、格別な配慮であった。保己一も宗固と同様に器量の大きな人であったので、寛政九年（一七九七）に、保己一の弟子で南部藩士の黒川盛隆が「万葉集」等の古典について教えを請うたときに、保己一は加藤千蔭や村田春海に弟子入りを勧めたという。しかし盛隆は保己一に遠慮してしばらく放っておいたところ、保己一は自分への遠慮があるかと思うが、わずか一年の勤番で江戸において学問をしようとする者が、時間を無駄にせず早く行きなさい、と言ったという。盛隆は後日、自分の随筆集『松の下草』で「保己一の心は公正・寛大で、偏屈な田舎学者ならば嫉妬心から他の師匠を勧めようなことは言うまい。老中の戸田采女正や堀田撰津守が鼻屑にしているのも尤もである」と書いている。このことから、日頃の保己一の公正寛大な態度は、幕府の重要人物からも大きな評価を得ていたことがわかる。

六. 民話の中の塙保己一

市内には塙保己一に関する民話・昔話が幾つか残されている。当然ながら保己一の子供時代の話が多い。田島三郎著『児玉の民話と伝説』（上中下巻）に収録されているものから幾つか概要を紹介しよう。

検校のローソク立て



燭台（兄玉町児玉 實相寺所蔵）

市内児玉町児玉の實相寺には検校塙保己一が寛政十二年（一八〇〇）に奉納したローソク立て（燭台）が残されている。實相寺は保己一が生まれた荻野家の菩提寺である。このローソク立てについて、保己一は若くして江戸に出て、日頃の修行に追われ、出世するにあたって多忙な毎日を追われ、郷里保木野に帰ることができなかった。しかしながら保己一の頭の中では、実家のこと、ご先祖様のこと、友達のこと等心配していた。そして「暗闇の中でも灯りは誰の心にもへだてなく希望を与えるものだ」と考え、さらに子供の頃から目が見えず、「明るさ」への気持ちを考えてこのローソク立てを菩提寺に奉納したのだという。この燭台には保己一の両親の戒名を刻んでいるので、両親の菩提を弔うためであったと思われる。

もち草摘み

寅之助は目が見えなくなつてからも友達と一緒に遊ぶのを楽しみにしていた。ある日、ガキ大将と他の友達と一緒に野に出てもち草摘みをした。ガキ大将は寅之助の母から頼まれたといつて、みんなで取つたもち草を広げると、もち草でない他の草が多くあり、寅之助のザルにその悪い草をいっぱい入れ、自分のザルにはもち草をいっぱい入れて残りを別の二人に分けて入れた。寅之助は自分のザルにもち草でないのがいっぱい入っていたので、「おらんちじゃ餅

に入れない草が多いからみんなにあげるよ。これから自分一人で摘んでから帰るよ。また明日遊んでくれよ。」



田島三郎『児玉の民話と伝説』
下巻（平成4年）より

いに摘めるの」と聞くと、寅之助は「龍清寺の和尚さんが、手を探つたり、匂いをかいだりしながら、何でもわかるように教えてくれたんだよ。おら、おつかあ、心の目が見える大人になる」と、夕日の落ちた田んぼのあぜ道で話したという。

寅たいじ

あるとき、いじめっ子達は寅之助が付いてこれないようになにやら相談していた。いじめっ子の一人は寅之助に、「今日はお大尽の竹藪からタケノコを取りにいくん。お前は足手まといだから付いてくるな」と、寅之助は「おらあ、みんなと遊びたいんだ。おらが捕まってもみんなのことは決して話さないから連れて行っておくれ」と。いじめっ子達はこれがねらいだったのだろう。もし見つかったら寅之助が囹になつて捕まってくれるから安心だと。そうこう

してタケノコを取る声が寅之助に聞こえていると、誰かが「人が来たぞ、逃げろ」と言った。友達のはかりごととも知らない寅之助は、地に伏せ、這いずりながら竹藪へ入ったときに耳にした水音を頼りに出口を目指した。しばらく行くと竹藪のクネに行き着いた。クネの先には堀がめぐっていた。寅之助は堀の幅と深さがわからないので、持っていた杖と懐に入れていた小石で堀の大きさを調べた。そんなに大きくない堀と考えた寅之助は近くに生えていた太い竹を見つけると登り始めた。竹の先の方へ枝をかき分けながら登ると、竹は寅之助の重さで曲がるわ曲がるわ。その内に寅之助の足が畑の畦に触れて、堀の向こう側に渡ることができたという。あとで母にこの話をする母は、「お前は何故竹に登ったの」と聞いた。寅之助は「和尚さんがね、雪が降った次の日に竹に積もった雪を落とす話をしてくれたのを思い出してね。おらが雪になったんだよ」と話した。母親はこの話を聞いて驚くやら感心するやらの体だったという。寅之助は「おっかあ、みんなが藪に入るときに、今日こそとら退治だ」といつていたけど、何のことだんべえ」と言った。母親は無心に友達を慕う寅之助を見て、止めどなく涙を流したという。

深谷の枯れ松

寅之助の母親が亡くなった頃の話と言います。ある日、一人の絹商人が保木野の宇兵衛を訪ねてきました。絹商人と宇兵衛は古い知り合いで、寅之助を江戸に出したらどうかと話を持ちかけたという。宇兵衛は和尚や名主と相談してから決めると言い、絹商人は五日後に返事を聞きに来ると言って帰ったという。宇兵衛は早速住職と名主に相談し寅之助の出府を決めたという。その年の六月頃寅之助は絹商人に連れられて江戸へと向かった。中山道を進み深谷宿を過ぎ

松並木の中程の茶屋で休憩した。寅之助は用足しで茶屋の裏に行つた後、茶屋のおばあさんにこう尋ねた。「おばあ、裏の松は枯れているのかい」と。おばあさんは寅之助に向かって「冗談じゃないよ。なあ商人さんや」と言った。寅之助は「おかしいなあ、撫でてみても息をしていないんだよな」と言った。おばあさんは「決してよその屋敷でその木が枯れているなんていつてはいけないよ」と寅之助に注意したという。それから一年後、寅之助を連れて行った絹商人が、その後の寅之助の様子などを話してやろうとその茶屋を訪れると、おばあさんは「たまげたよ、あの松の木を見てみな、本当に枯れてしまったよ」と。さらに「商人さんや、あの子とはとつてもえらい子だよ、今に何をしてくんかわかんねえ」と言ったという。このおばあさんは名をおぬいといい、深谷に伝わる「名物おぬい餅」にまつわる話という。



田島三郎『児玉の民話と伝説』
下巻（平成4年）より

荻野氏・埴氏略系図

○小野 篁 おの たかむら

横山孝泰 たかやす

荻野五郎季時 おきの すえとき

荻野 某 見玉郡保木野住

宇右衛門 うえもん

荻野宇兵衛 うへえ

寛政七年没

きよ

【江戸】

総検校 埴保己一 はなわほきいち

寅之助
文政四年没

とせ子

寅之助

道之助

熊太郎

次郎 (忠宝)

文久二年没

なを

忠韶 ただつぐ

幸正

さち

てふ

全三郎

さだ

さく

忠雄 ただお

とせ子

静枝

道忠

忠和

五郎 (兄忠雄の跡を継ぐ)

五郎 養子

保次

保雄

【保木野村】

卯右衛門

弥七 (養子)

たに子

梅吉 (養子)

せき子

茂十郎 (養子)

さは子

武平

弥七

悦一

参考文献

(主要なものにとどめた)

- 萩野信敏
中山信名
渡邊知三郎
杉本文太郎
清宮秀堅
埼玉県教育会
阪本百次郎
下中彌三郎
有馬祐政
市島春城(謙吉)
執行助太郎
齊藤茂三郎
金鑽宮守
清水 廣ほか
久米元治
長沼依山
総検校塙保己一先生遺徳顕彰会
太田善磨
塙保己一検校百五十年祭記念論文集編集委員会
田島三郎
温故学会
児玉町史編さん委員会
堺 正一
田島三郎
大井莊次
堺 正一
温故学会
白根記念渋谷区郷土博物館
温故学会
- 塙勾当伝
温故堂塙先生伝
空前絶後盲人之王 塙検校傳
塙保己一
古学小伝
徳育資料 第壹編 塙検校詳傳
塙保己一先生
偉人研究第七十五編 塙保己一言行録
賢哲傳 修養文庫第二編
藝苑一夕話
読本の読本 第二編 塙保己一
塙検校歌集
塙検校遺物集
遠峰(こだま) 第一号〜第六号
塙保己一先生に就いて
塙保己一伝
塙保己一物語
人物叢書 塙保己一
塙保己一記念論文集
児玉の民話と伝説 上中下
塙保己一論纂 上下
塙記念館所蔵文書 児玉町史料調査報告第十七集
奇跡の人・塙保己一
塙保己一物語
北武蔵人物散歩
素顔の塙保己一
塙保己一の生涯と『群書類従』の編纂
特別展 渋谷に残された版本
温故叢誌 一号〜六十七号
- 明治二十五年
明治三十五年
明治三十六年(再版本)
明治四十一年
明治四十五年
大正元年
大正八年
大正十一年
大正十三年
昭和四年
昭和十二年
昭和二十四年
昭和二十九年
昭和三十一年
昭和三十一年
昭和四十一年
昭和四十六年
昭和五十九年〜平成四年
昭和六十一年
平成十一年
平成十三年
平成十四年
平成二十年
平成二十一年
平成二十一年
平成二十四年
昭和七年〜平成二十五年
- 黄眉山房
金港堂書籍株式会社
郁文舎
埼玉県教育会
農村之青年社
内外出版協会
修養文庫刊行会
早稲田大学出版会
執行文庫
温故学会
金鑽宮守
児玉温古会
史跡塙保己一旧宅修築後援会
刀江書院
総検校塙保己一先生遺徳顕彰会
吉川弘文館
温故学会
児玉町民話研究会
錦正社
児玉町教育委員会
埼玉新聞社
児玉町
まつやま書房
埼玉新聞社
温故学会
白根記念渋谷区郷土博物館
温故学会

(表紙説明)

塙保己一が終生覚えていたと言われる「すみれの紫色」「柚子の黄色」「ほおずきの赤色」をモチーフに表現しました。

本庄市郷土叢書 第4集

本庄市の人物誌 ①

盲目の国学者 塙保己一の生涯

平成二十七年三月二十五日

発行 埼玉県本庄市教育委員会
印刷 株式会社文林堂印刷所

